

岡のべのかやが下葉の秋の露風よりさきのみだれなりけり

夕尋蟲

松蟲の聲する方の草まくらこよひも野邊に宿やからまし

曉見月

秋ふかき有明の月の山の端に松の葉白く吹くあらしかな

野外月

日くるれば野原の村にかへる人かねて宿もる月や見るらむ

夜聞鹿

里人の月見る山のふもとまでこころをしるは小男鹿の聲

關路風

月の夜は關の小川の水きよみ空すむ風ぞひかりなりける

庭上露

百敷や玉のまがきの白露をわきてぞ見つる雲のうへびと

秋 曉

空晴れて雲をさまれるあかつきは星のやどりも曇らざりけり

秋 夕

秋きては玉しく庭のくれ竹に露しげからぬ夕ぐれぞなき

秋 夜

限あれば雲もまがはぬ秋風をいかに吹けとかすめる月影

結 願

かきのもと秋色そむる言の葉のかきあへぬまでつもりぬる哉

同十六日

鶴伴仙齡

松にすむ鶴の齡にとりそへてとどめ置くらむ春もかはらし

同三月當座

夕 花



歸るべき家路もしらず山櫻ちりのまがひのゆふぐれのそら

春 雨

春の雨のしづのをだまき幾度か我が身よにふるながめしつらむ

同四月當座

卯花を

神祭る卯月になれば白妙の花のしらゆふかけぬ日ぞなき

同當座

春寄松祝

百敷や庭の小松の若葉にもさしてぞ千代の影は見えける

同日俳諧歌當座

歸雁を

かへる雁雲のほかなる一聲をいるさの山のゆみはりの月

同月當座

月前卯花

うの花のまがきにまじる月影は雪より上に雪ぞちりける

同四月比夢に或人のもとよりとてあり初五文字

はなし

此五文字後日付之 さくらあさのおふのうらなしなかなかにしたひなかけそ思ふ心を

同 比

題不知

さりともと契りしことを頼むかな我れのみ思ふ心ならひに

同五月於萩戸當座

夕五月雨

吹く風に萩の下葉や五月雨の名残におもき庭のゆふづゆ

曉 戀

あかつきの涙も袖にあらはれぬちりうちはらふ聞の月影

順徳院御集



同比當座

雨中萩

萩が花うつろふ庭の秋の雨にぬれてを折らむみぬ人のため

題不知 深夜戀

月まつと人にはいひし宵のまのやがて有明になりにけるかな

此歌は題不知歌也。今般定家家隆之時相應歌題を書之已下如此事

多可改之。

同比當座

戀

月にのみ契をかけて眺むれば夢も空しきうつやまかせ  
照りもせずかすめばかすむ月ゆるは曇りもはてじ人の面影

同六月歌合當座

蟬聲秋近

露の色ももりのしめ繩秋かけてかたへ涼しき蟬の羽ごろも

被返書戀

みづぐきのおかぬかたみは玉章のかへるもつらき葛の浦風

寄社頭雜

神路山たのむかたより吹く風に思ひそめにし色やみゆらむ

同比歌合當座

夏野風

吹く風も結ぶばかりの夏草に野中の水のあとたどりつつ

深夜戀

笹の葉やおきゐる露も夜ごろへぬみ山もさやに思ひみだれて

寄海雜

やほか行く濱の眞砂のありかすにかけともつきぬわか波

同比當座



山鹿

鳴く聲はしをれざりけり小男鹿のふすやくさかの山の雫に

社頭

神風や契もくちじ五十鈴川たのみをかけしわたらひのしめ

同比當座

寄暮戀

きりぎりすなくや草葉は色に出でぬ我れぞつれなき秋の思は

同比以栗下題各詠之 當座

曉月入窓

かへるさの人は出でぬるまきの戸にかはるは月の光なりけり

早涼思衣

月だにも雲の衣はあるものをまだ一重なる風ぞ身にしむ

同六月十八日歌合

水邊柳

川浪に風の吹きしく白露やつらぬきとめぬ玉のをやなぎ

江上霞

難波江の汐干のかたやかすむらむ蘆まに遠きあまのいさり火

朝落花

久方や朝日いざよふ山風のくもらでくもる花のかげかな

夜歸雁

かりがねは行方も見えぬ山の端になほいざよひの山野の奥の端の月

山晚風

風さわぎ松にもれくる鐘の音はたが住む山の夕なるらむ

野曉月

ささわくる野邊のかりほの筈を荒みあはでぬる夜の月ぞ残れる

同晦日當座



みそぎ川をるやあさてのぬれながら露をかけたる秋の初風

同七月七日

七夕七首

天の川てる月なみをかぞへつつ今宵は秋のほしあひの空  
秋はなほ淺瀬しら波たどるまで霧たち渡るかささぎの橋  
七夕の行きあふ空やふけぬらむかたへすすしき天の川風  
年にまつ今宵はさても天の川あはむあしたをいかで忍ばむ  
秋きても逢はずば何を七夕にかしつる絲の玉のをにせむ  
大方の年のをながき秋の夜もおもひぞあへぬ星あひの空  
天の川もみぢの橋のから錦わたれどたえぬ契とぞおもふ

同月當座

山路夕雁

かりがねのきこゆる空はみどりにて夕さびしき山の下道

朝草花

萩の露けさもほしあへぬ袖にしもいかなる色の嵐なるらむ

又當座

秋

秋の日のくれなる匂ふ山のはにうつろふ雲のなほしぐれゆく

同七月二十一日有心無心作者ども歌つかうまつ

る次に當座

草花徐開

小男鹿の朝たつ野邊のからにしき枝にひとむら秋風ぞふく  
小男鹿のなみだふる野の秋風に萩の下葉も色かはるころ

田家秋雁

風わたる秋のかりほのほのと稻葉をわくる小男鹿の聲  
門田もるたがいねがての秋風にさそはれわたる初雁のこゑ

順徳院御集



同八月當座

海邊眺望

わたの原つゆ吹きはらふ潮風をたよりに過ぐる浦のともぶね  
秋ながら木の葉がくれもなかりけりゆらのみさきの有明の月

同比當座

擣衣

時しもあれたが里人のから衣ころも夜さむの月にうつらむ  
月

萩原や人にしられてゆく秋のすゑこす風に残るつきかけ

同比當座

江山夜月明といへる詩題にて

あはぢ島かよふ千鳥の聲たけぬ入る山のはもすみの江の月

同八月十五夜

月前竹風

天つ風みかきの竹の萬代にまづあらはるる秋のつきかけ

月前擣衣

あらしふくと山の月はふけにけり衣うつなる聲ぞ近づく

月前眺望

めぐりゆく山の木の葉をいでぬめり月は時雨の染むる色かは

同夜當座

禁庭蟲

玉敷やみかきの竹の白露に蟲の音しげきあきかせぞふく

雨中戀

いその神ふるとも雨の夕をも待つべきものとなほや頼まむ

同二十一日歌合當座

山家月



初瀬山川音さむくなりけりふもとの里も月やすむらむ

夕紅葉

秋の日のうつろふ山の夕暮は時雨もをしき峯のみち葉

同比當座

春

うぐひすの木づたふ枝にちる花ははね白妙の雪かとぞみる

夏

すぎぬなり淀のわたりの時鳥まだ深き夜の月のひかりに

戀

袖の色をしのぶもちすり忍べどもたれゆる露のみだれなるらむ

雜

山の端にはつかの月もいでにけりこれや有明の光なるらむ

又當座

待月

山のはに有明の月はまつものをいつより澄める心なるらむ

同八月當座

野亭月

露わけている野の薄かりいほのたが手枕に月をみるらむ

川曉風

龍田川水上しろく明くる夜の山もひとつに秋かせぞ吹く

野外夏草

露分くる夏野の草のぬれ衣なるとはすれど色もかはらず

月色似秋

風の音も身にしむ色はかはらねど月に幾度秋をまつらむ

契經年戀

つれなくていく秋風を契りきぬきさ山陰のまつとせしまに



同九月九日撰歌合當座

月前菊

ひさかたの雲井の庭に咲く菊の月の雪にもあやまたれけり

水邊菊

白菊の花のあたりに行く水のわたらぬ影に千代はへぬべし

寄菊雜

心あてにをりからくけふや山がつの垣ほにさける白菊の花

同九月比當座

杜間露

日ぐらしの涙やよそにあまるらむ秋といはたの杜の下風

深夜蟲

蟲の音もふけぬる秋の長き夜をおくりかねたる松杜の月の風かな

月前望

物思はでそれとながめぬ秋の夜も月にはぬるる袂なりけり

寄海戀

しらすなよ人に心をおきつ浪かくばかりなる恨ありとも

寄鳥戀

鶯の音になきてだに年へにきぬれにし袖のはるさめの空

寄夕戀

わくらはにまつ夜ふけにし契だにたえて恨むる夕暮の空

同十月十六日菊下會菊合後數本植萩戸前月照菊

之興人人詠三首奏管絃

うつしうゑてみかきの菊の初霜に枝もたわわの月ぞうつろふ

あまつほし光をうつすみかは水おいせぬ菊のかげやせくらむ

花みつつちよまつ時ももろびとの袖をかさぬる庭のしらぎく

同比當座



野 雪

はし鷹のかへる山路はうづもれぬみ雪ふりぬる野べのかり人  
同十月比雅經朝臣東國のかたへまかるとて道よ  
り女房中に「しぐれする程は雲をへだつとも濡  
れゆく袖を空にしられむ」と申しける御返し女房  
にかはりて

歸りこむほどは時雨の衣手にへだてて遠き雲のなりとも  
同十一月十六日

松間雪

ゆきのうちにつれなき色はなけれども冬ごもりせぬ庭の松かな  
同十月二十四日名所百首ひとびとつかうまつり  
しとき

春 部

音羽川

音羽川山にや春の越えつらむせきいれておとす雪の下水

玉島川

玉島や川瀬の波の音はしてかすみにかぶ春のつきかげ

高 砂

浪まより夕日かかれる高砂の松の上葉はかすまざいかすまざりけり

春日野

春日野やこそこのやよひの花のかに染めし心は神ぞしるらむ

三輪山

花の色になほをりしらぬかざしかな三輪の檜原の春の夕暮

葛城山

朝みどりいとよしかくる青柳のかつらぎ山の春雨のそら



手向山

白妙になびきにけらし夕だすき手向の山に花やちるらむ

伊勢海

いせの海かすむ汐干のかたをなみ歸るや雁の聲ぞきこゆる

志賀浦

さざ波やしがの浦風吹くまに氷をいづる春のはつはな

三島江

みしま江やなぎさに沈む松の葉の色より深き春の影かな

鹽竈浦

雲の波煙の波はそれながらおぼろ月夜のしほがまのうら

宇津山

するがなるうつの山邊にちる花よ夢のうちにもたれ惜めとて

蘆屋里

蘆の屋のなだのしほやのあまの戸をおし明方ぞ春は淋しき

吹上濱

ゆふがすみ吹上の濱のこのごろは緑になびくおきつ白波

湯等岬

櫻咲く山には春もなかりけり由良のみさみなときのあけぼのの空

忍山

都にも花散りあへぬみちのくの忍ぶの山もはるかせの聲

水無瀬川

ことにいでていはぬ色にやみなせ川かはらじ春の山吹の花

大淀浦

大淀の浦路のとけき春の日にかすみぞのこる松のむら立

田籠浦

ぬれつつもしひてやをらむ田子の浦の底さへ匂ふ春の藤波



末松山

三月もや末の松山春の色にいまひとしほの浪は越えけり

夏部

大井川

大井川みゆきふりにし色ながら入江の松に夏も來にけり

信太杜

風の音も秋の色にやいづみなるしのだの杜は青葉なれども

猪名野

風わたるゐな野のをざさ打ちなびき露もたまらぬ白雨の空

御裳濯川

夏の夜も涼しかりけり神風やみもすそ川にすめるつきかげ

伊香保沼

まこもかるいかほの沼のいかばかり波越えぬらむ五月雨の頃

天香久山

白妙にころもほすてふ夏の日の空にみえたる天のかぐ山

大江山

大江山しげみがしたにやとりても人に知らるる螢なりけり

難波江

なには江の蘆火のけぶり立ちのぼり夕日涼しき夏の浦風

美豆御牧

刈りてほすみつの御牧の夏草は茂りにけりな駒もすさめす

松浦山

夏山やまつらが沖の西の海そなたのかせに秋は見えつつ

秋部

初瀬山

初瀬山ねざめ驚く鐘の音も目にこそみえね秋はきにけり



立田山

たつた山紅葉吹きしく秋風に落ちていろづく松のした露

須磨浦

須磨の浦あまの戸渡るかりがねの聲すみのぼるいざよひの月

宮城野

みやぎ野の萩の葉よわき朝露を枝ながら吹く秋の風かな

水莖岡

水莖の岡のあさちのきりぎりす霜のふりはや夜寒なるらむ

小倉山

小倉山峯の木の葉にききなれてしぐれせぬ夜もぬるる袖かな

宇治山

秋深き八十宇治川の早き瀬に紅葉ぞくだすあけのそほ舟

常磐山

其ノ

秋ぞとも誰れかはいはじ椎柴のときはの杜に鹿はなくなり

三室山

みむろ山神のいがきにはふ葛のうら吹きかへす秋の夕風

高圓山

たかまどの野分の風にけふみればまだき草木の色ぞしをるる

伊駒山

いこま山雲なへだてそ秋の月あたりの空は時雨ふるとも

生田池

人すまばさらにやとはむ津の國のいくたの池の秋の月影

清見關

きよみがた關吹き越ゆる秋風にいや遠ざかるあまの釣船

武藏野

緑なる春はひとつの若草もあきあらはるる武藏野のはら



伊吹山

玉かづらいぶきの山の秋の露たが面影をまつむしのこゑ

佐良科里

さらしなや夜わたる月の里人もなぐさめかねて衣搦つなり

白河關

たよりあらば都へつげよかりがねもけふぞ越えつる白河の關

野島崎

少女子が玉裳のすそやしをるらむ野島が崎のあきの夕露

明石浦

明石がたあまのとまやの煙にもしばしぞ曇る秋の夜の月

阿武隈川

あすはまたあふくま川のしがらみに昨日の秋の色や残らむ

冬部

清瀧川

清瀧や岩まによどむ冬川のうへはこほりにむすぶ月かげ

小鹽山

をしほ山松の葉とづる夕霜に色こそなけれ峯のこがらし

住吉浦

住吉の松のあらしやかはるらむ夕波千鳥こゑまさるなり

片野

夕がりのかた野の眞柴むらむらにまだひとへなる初雪の空

田蓑島

雨によるたみの島のあま衣さらではぬれぬ冬の袖かは

有乳山

冬の夜の峯の嵐やあらち山つきよりか<sup>かこ</sup>る野邊のあさぢふ

浮島原



時しらぬやまは雪げの雲ながらありあけの月の浮島の松

安達原

霜はけさあだちのまゆみちり果てて残らぬ色は何にそむらむ

因幡山

雪のうちに冬はいなばの峯のまつつひにもみぢぬ色だにもなし

鏡山

ゆく年をかがみの山の冬の月みる影さへにくもりなきかな

戀部

伏見里

すがはらや伏見の里のささ枕夢もいくよの人目よくらむ

霞浦

ほのかにもしらせてけりなあづまなる霞の浦の蜚のいざり火

石瀬杜

神なびのいはせの杜の初時雨しのびし色はあきかせぞふく

筑波山

つくば山茂きまさきの數よりもしらぬは人の心なりけり

袖浦

袖の浦の波の花にもしらざりきいかなる秋の色にこひつつ

益田池

思のみます田の池のみがくれにしらぬあやめのねに亂れつつ

高師濱

沖つ波たかしの濱の松もなほぬるるばかりの名こそありけれ

阿波手杜

わが戀はあはでの杜の夏のくさ人こそしらね茂るころかな

志賀須香渡

かくしつつ暮れぬる秋はしかすがのわたりも淺き契とぞ思ふ



濱名橋

しるらめやはまなの橋のたえずのみ下行く水の深き心を

磯間浦

かみじまや磯まの浦にあまのかるもにすむ蟲の身を恨みつつ

守山

時雨のみもる山影の下葉かはもの思ふ袖も色はのこらず

佐野舟橋

かけてだに契りし中は程遠しおもひをたえぬさ野の舟橋

安積沼

人心あさかの沼のうす氷かつみながらに消えやわたらむ

松嶋

逢ふにかふる契をのみぞまつ嶋や惜まれぬ身のならひなりせば

緒断橋

東路の緒断の橋もあるものをいかに朽ちゆく袖とかは知る

三熊野浦

みくま野の浦より遠にたつ霧のはれぬ思をなほやへだてむ

鳴海浦

よそにのみなるみの浦の夕煙うはの空にもいかが頼まむ

二見浦

玉くしげ二見の浦の夕づく夜明けても見ぬは夢路なりけり

名取川

おろかなる涙ぞあだの名取川せきあへぬ袖は顯れずとも

雑部

芳野川

よしの川浅き瀬もなく行く水のひとの心はうへぞつれなき

鈴鹿川



底清きすすか河原のしき波のまなく時なくたのみてぞふる

不盡山

ふじのねに時ぞともなく立つ煙をちこち人もおもなれぬらむ

還山

都人かへる山路は跡たえぬさかひもしらぬ秋のゆふぎり

海橋立

草の原いく野の末にしらるらむ秋風ぞふく天のはしだて

飛鳥川

あすか川ななせの淀に吹く風のいたづらにのみ行く月日かな

鳥羽

年へぬる松もむかしに山しろのとはにあひ見む千世の古道

辰市

たまひめや多くの民のたつの市にくるれば歸る數も見えけり

吹飯浦

蘆邊より汐みちくらし天つ風ふけひの浦にたづぞ鳴くなる

布引瀧

たちぬはぬ紅葉のころも染めはててなに山姫の布引の瀧

長柄橋

いにしへにあらすながらの橋柱ふりにし跡をしのばすもなし

玉川里

日にみがき風にみがける光かなのどかにすめる玉川の里

生浦

ちる浪は春の色にぞ櫻あさのおふの浦風いまも吹くらし

佐夜中山

ささの葉はさやの中山吹く風におのれねぬよの夢も結ばす

嵯峨野



かり人の草わけ衣ほしもあへず秋のさが野の四方の白露

角田川

今宵またたれ宿からむいほさきのすみだ河原の秋の月かげ

銚摩市

草も木もしぐるるころやあき人のしかまのかちも色勝るらむ

若浦

わかの浦やはねうちかはし濱千鳥浪にかきおく跡や残らむ

逢坂關

しるしらす行くもかへるも逢坂の關の清水に影は見るらし

三津濱

みつの濱磯こす浪のわすれ貝わすれすみゆる松がねの夢

建保四年正月十九日

松迎春新

庭の松千年のかげの春の雨は下草までもあまねかるらし

前右大臣公繼見此會返上時女房のもとへかしこ

みも玉のみことかこをささげみて嬉しさにこそつつ

みかねぬれれとよみてつかはしけるに御かへし女

房にかはりて

うれしさを袖につつまむ玉ならば言の葉よりぞひかりそひける

おなじころ實氏卿がもとへ梅花をつかはしたり

しにその夜他行の事ありて次以朝兵衛佐範經がい

まだ六位にはべりけるがもとへくやくもひと

よや花をへだてけむさそはれいでし月のゆくへ

にれと申しける歌の御かへし

順徳院御集



さそひけむ月のゆくへと思ひしをくやしかりける花の色かな

其後又進言殘而無指事仍不能注置。

これやさはわが身にとまる春ならむけふより後の花はありとも

三月十五日比内内進北野宮之詩歌合

春朝雨

吹きしをるあさけの風の花の香に染むるともなき春雨ぞふる。

社頭春

このたびはしらゆふかけて契りおきし手向の花も神のまにまに

同 比

春

降る雪にいづれを花とわぎも子がをる袖匂ふ春の梅が枝

春風にちりゆくかたやはれぬらむ花より西の山のはの月

夏

五月雨の雲の晴間を待ちえてし月みる程の夜半ぞすくなき  
みそぎ川夏のゆくせの水はやみ影もとまらぬみなつきの空

湖上月

志賀の浦や秋しく月のこほりにも遠ざかりゆく波の音かえりは

杜間月

神なびの森の木はしぐれねどかねてうつろふ秋の夜の月

田家月

秋田もるかりほの筈屋うすからし月にぬれたる夜半のさ筵

同 比

二百首和歌春歌十四首落夏歌二首落秋歌十二首落

あらたまの年の明けゆくやまかづら霞をかけて春は來にけり  
初春のはつねのけふの百千鳥鳴くねそらなるあさがすみかな  
さは姫のそめゆく野邊は緑子のそでもあらはに若菜つむらし



春日野やまだ霜がれのはるかせに青葉すくなき萩のやけはら  
奥山やものうかるねもまさるらむ人もすさめぬ春のうぐひす  
いつもきく入相の鐘の音までもおもひわかるる春のくれかな  
片山のならのはがしは吹く風の音こそまされ夏はきにけり  
蟬のはのうすくれなるの遅櫻をるとはすれど花もたまらず  
けふのみやかものみあれの葵草心ばかりはかけぬ間もなし  
五月まつ卯の花月夜空はれてかげにかくれぬほととぎすかな  
はちす葉や露の玉より池水のにこりにしまぬ夏の夜のつき  
みよし野の青根がみねの時鳥こけのむしろにきく人やなき  
夕立のなごりばかりに行潦なごり日ごろもきかぬかはづなくなり  
小山田のさなへも遠き月影にひかりぞうすき宵のいなづま  
山里のそとも竹を吹くかせに夕日すすしき日ぐらしの聲  
五月雨のはれまも青き大空にやすらひ出づる夏の三日づき

螢とぶ野澤の葦のたまゆらも浪のよすがに明くるしののめ  
青柳のかげふむ道のわすれ水やすらふひとは春ならねども  
照射するたかまど山のしかすがにおのれなかでも夏はしるらむ  
聞さむきありあけの月におどろきて衣うつなり遠の里びと  
秋をだにいつかと思ひし荒小田はかりほす程になりぞしにける  
山風になびくあさちは霜がれて色ことになる峰のみぢば  
しぐれゆく四方の木の葉の秋風をことぞともなき松の色かな  
榊とるころとは見えす檜の葉のもとつ葉もなき時雨なれども  
とふひともうけくに秋の奥山は道ふみわけぬもみちをぞ見る  
長月のはつかあまりの山おろしに紅葉ばながらよわる蟲の音  
とにかくながめし秋もとどまらず關のわら屋の夕ぐれ空  
敷島ややまにはあらぬから國の虎ふす野邊も冬はきぬらむ  
冬きてはあらはれぬらむ蘆の葉にかくれてすみし水の江の月



大井川おろすいかだの上にしもぬれぬとうかぶ冬のみちば  
冬ごもる尾花がもともあはれなりほに出でし秋の名残ばかりは  
高砂のをのへのつきやふけぬらむかは音すみて千鳥なくなり  
山里のまがきのすすき霜がれぬをざさばかりは風もたまらじ  
よひのまに窓うつ雨ときく程にあられにさむるあかつきの夢  
鳴のゐるかり田の面のこほるより残るもさゆる水のおとかな  
みよし野の嵐ぞ寒くしぐるなるあすは雪とやふるさとのそら  
よしの山いりにし人の音づれもたえてひさしき雪のかよひち  
ももしきや霜夜の月の影さえて庭火もしろきやまあゐのそで  
草枯の入江のこほりかさぬらしむれる鳥のこゑぞすくなき  
ふかき夜の雲の月やさえぬらむ霜にわたせるかささぎの橋  
冬の色よそれとも見えぬささ鳥の磯こすなみに千鳥たつなり  
色ふかき庭の木の葉をみしよりもつもりて惜しき年の暮かな

わが戀はこほらぬ水にふる雪のそれともなくて消えや渡らむ  
今朝はしもおきけむ方も白露の玉の緒ばかりあるはあるかは  
みさごゐる荒磯波による玉のありとはみえて手にもかからず  
あしがものさわぐ入江の水ごもりに身を浮草のぬれつつぞふる  
今さらに人やはなにとつららゐる下にも忍ぶみづからぞうき  
人心のきばにすだくかげろふの夕ぐれごとになにみだるらむ  
逢ふ事はいなへの沼のおほる草よそにやこひむ袖はくつとも  
奥山のかすみかくれのさくら花まだみぬ人に戀ひやわたらむ  
さりとともと思ふ心にながらへてあらば逢ふ夜を身に頼みつつ  
思ひやるそなたの空もしぐるなりかこち顔なる雲のいろかな  
思ひいでよ木の葉の下のわすれ水うつりし色にたえははつとも  
いつはりと思ひながらも頼むかなうきをしらぬは心なりけり  
よしさらばたかまの山の秋の雲しぐるる色をよそにだに見む



今はまたおもひたゆべき夕暮をしらすがほにも何ながむらむ  
 わがそでや松のかげなる秋草のうへはつれなき色に出でなむ  
 鈴鹿川いせをのあまの暇なみいかなる瀬にもかけぬ日ぞなき  
 男山むとせの春はかざしきぬくもゐのさくらあはれともみよ  
 里人のことは夏野にかかるくさのしげきめぐみをよに頼みつつ  
 月の夜の松のあらしや旅人の千千にものおもふつまとなるらむ  
 こよひねて朝たつ袖やまがふらむ昨日のくれの峯のしらくも  
 明けわたる四の宮がはら霧はれてをちかた人のかすぞみえゆく  
 山がつの竹のあみ戸の隙をあらみおくもあらはにすめる月影  
 から崎や鴉のうき巢のいかにしてさすらへ渡る世を頼むらむ  
 あはれなる遠やまばたのいほりかな柴の煙のたつにつけても  
 なかなかにをちかたびとや眺むらむわがすむやまの峯の月影  
 すまのうらやあまのホノマとほき入汐にうつるも青き山のいろかな

明石がた波路はるかになるままに人こそ見えねあまのつり船  
 幾度かしぐるる空の鐘の音にけふもくれぬとうちながめつつ  
 百敷やふるきのきばのしのぶにもなほあまりある昔なりけり  
 春のたつ民のかまどのけぶりにもどけき空を人にしれつつ  
 雪のうちに春やこしちにあら玉の年たちかへる山かせぞふく  
 朝日山のどけき空のひかりにや春をしるらむうちのとびと  
 風吹けば峯のときは木露落ちてそらより消ゆる春のあわゆき  
 君がため出づる野原のかたみにやしひても春の若菜つむらむ  
 うぐひすのなきてうつろふ涙にや香さへこぼるる梅のした風  
 かすみゆく難波のあしの薄墨に數かきまよふはるのかりがね  
 たかせさすさほの川波たちにけり山の木のめもはる風ぞ吹く  
 いかならむ人のこころも住吉のあさかの浦のはるのあけぼの  
 さくら咲く岡べの草の浅みどり花もひとへにかすむころかな



かはらしなふるき都の家ざくらうゑけむ人のむかしなりとも  
春といへば花のさかりに歸る雁あひ見むことも人のためかは  
はるかせとなにいとふらむ鶯のおのがはぶきぞ花もしをるる  
ほのぼのと明けゆく山の櫻ばなかつふりまさる雪かとぞ見る  
こきまづる柳さくらのからにしき都のものとなにならひけむ  
春雨をみねのさくらに吹きませてあらしにまさる山川のみづ  
大方のあけぼのとしもなかりけりみやまの奥の春のけしきは  
行く水のそこはかとなくうつろひぬ山ぶきのせの花のしがらみ  
夕日さすむかひの岡の岩つつじうつろふいろは春やくれぬる  
山ふかきさくら吹きまく風の音の花のまぎれに春やくくらむ  
もろびとの花のたもとは夏くとも衣かへうきものとは思ふ  
夏衣きなれの里のほととぎすかはらずぞきく去年のふるごゑ  
玉川の里わく夜半のつきなれや卯のはなさけるゆふやみの空

河なみにねざしとまらぬ草の名のうき身こがれて飛ぶ螢かな  
時鳥からくれなゐのなく聲やくものはたてのいろにみゆらむ  
夏引の手びきのいとのをりからや風もさはらぬ蟬の羽ごろも  
かやり火の煙ふきゆくたに風にたえだえくもる宿のつきかげ  
池水のはすのうき葉にかくろへて夕暮ちかくなくかはづかな  
五月雨にかりほすひまもなつ草ののじまが崎も浪越ゆるころ  
月だにも雲のいづくに夏の夜のやみはあやなしあけぼのの空  
早苗とるたごのもすそのぬれごろもひも夕暮<sup>風</sup>や涼しかるらむ  
夏山のつきをやしたふほととぎす戀しき人はたれとなくとも  
夕月夜空も涼しき松かげのあさちがうへのひぐらしの聲  
わびつつもさてやねななむ時鳥こぬ夜の月は村雨もなし  
秋や今ちかのうらわの夕まぐれ浪の花には時もわかねど  
けさよりや野なる草木もあだ人の露わけごろも秋風ぞたつ



初雁も聲ほにあぐる秋風をしるべに出づるあまのつり舟  
 吹きむすぶ初秋風の葛のはにうらみそめたる松蟲のこゑ  
 むさし野の萩の上こそ秋風の下葉の露やかすまさりゆく  
 わけきつる野原の露の白妙に袖ものこらぬ月のいろかな  
 大空のくまなき月はやどれどもみぐさぞくもる秋の池水  
 女郎花末もとををにしく露の色にしをるる野邊の秋かせ  
 立田山さえては春の色もなしうす霧かすむ秋の夜のつき  
 露はなほ千種ながらにあだし野の秋を鶉の聲のみぞする  
 タづく日さすや岡邊の庵までなびく田のもの村雨のこゑ  
 あき山の四方の草木やしをるらむ月は色そふ嵐なれども  
 村雨のなごりもしばししぐれけりしのだの杜の秋の夕風  
 故郷の軒の玉水おとづれてしのぶにふるる秋のつきかげ  
 しぐれゆくまゆみのおもの薄紅葉たまらぬ色に秋風ぞふく

秋ふかき軒端の木の葉ちりにけり嵐にはるるねやの月かげ  
 秋風は桐のくちばにおとづれて梢むなしきむらしぐれかな  
 山人の日も夕ごりのしもとゆふまさきのかづら今やそむらむ  
 紅葉ばの色こき時はあかねさす峯の朝日もわかれざりけり  
 音羽川秋せく水のしがらみにあまるも山の木の葉なりけり  
 もみぢばをぬさに手向のやまかせの行方定めぬ秋の暮かな  
 冬きては時雨ぞいたくまさるらし木の葉に變る色はみえねど  
 置く霜もなほ白妙の菊のほないかなる色にうつりた<sup>ミ</sup>めけむ  
 いかばかり麓の里のしぐるらむ遠山うすくかかるむらくも  
 水鳥のおのがあを羽や残るらむゆふ霜がれのあしの下かげ  
 み山より時雨ははるるむらくもに日影なみよるにはの松風  
 駒なべてかりばのを野のゆふかせに鳥立の草の色ぞ寒けき  
 ふる雪はかつ消えゆけどつの國の蘆屋の波の音はまさらず



都人かつ降りまさる庭の雪たづねてのちのあとはなくとも  
夜やさむきとよのあかりの冬の月少女の袖は霜にさえつつ  
しぐれにしまがきの竹のよともにも色もかはらぬ冬の月影  
影きよきつきのかがみの池水にくもりもあへぬ雪はふりつつ  
山川のこほりもうすき水の面にむらむらつもるけさの初雪  
降りつもる雪のあしたの山里は鳥けだものの跡だにもなし  
爪木こる宿はけぶりのおもなれて雪げもわかぬ冬の夜の月  
川なみのいかだし早くさす棹のとどめもあへぬ年の暮かな  
かりごろも萩の葉分の秋の露消えても色に出でざらめやは  
あだ名やはたつをだまきのつかねをにせむかたもなき我が心哉  
いかにしていかにねしよの名残とて枕定めぬよひよひぞなき  
忘らるるうき名やまだき立田姫たが言の葉におもひそめねど  
思ひわびさてもまたれし夕暮のよそなる物になりにけるかな

うきたびに背きてもまたいかならむ此の世ひとつの思ならねば  
あしびきの山より月の色に出でて暮れゆく空はなほぞかなしき  
いつはりと思ふ心もさだまらずたがまことなる夕ぐれもがな  
かちをたえこと浦風にゆく舟のうきせの波にこがれてぞふる  
明けぬとて峯にわかるる白雲や暮をまつまも消えかへりつつ  
あかつきのゆふつけ鳥のから衣たがきぬぎぬの名残なるらむ  
ことの葉も我が身しぐれの袖の上に誰れをしのぶの杜の木枯  
あかつきの名残を月にとどめてもいやはかななる鐘の音かな  
とこの山下ゆく川のいさやまたしらぬあふせに何よどむらむ  
うしとても身をばいづくに奥の海の鵜のある岩も波はかくらむ  
あめがしたふるにかひある頼みかな山田の原の神のめぐみを  
人ごころみたらし川の清き瀬にすみにごれるも神やわくらむ  
神さびてむかしも遠きすみよしの松にかひある言の葉もなし



家家のおもひや人はか<sup>か</sup>はるらむいづくも秋のつきはみるとも  
 故郷はすみこし池もみぐさゝるて月もむかしのものとやは見る  
 よろづ代を岩井の水に結びおきて濁らぬかげと思ひけるかな  
 白妙のかべにそむけるともし火の影かすかなるありあけの空  
 今さらにとふべき人もあらしふく三輪の檜原の音のみぞする  
 むすぶ手のつめだにひぢぬ山水に底ふかくすむ月のかげかな  
 都人かりそめなりし草の庵にいつすみなるこころなるらむ  
 はるあきの花も紅葉も時しもあれつれなき松ぞ色はそへける  
 里とほくはやまの道やなりぬらむかけひの水の音ぞされなれる  
 あきらけきならの都の夜半のつきみぬおもかげもすむ心かな  
 幾秋もつきじとぞ思ふ水無瀬川おいせぬ菊のかげをせきつつ

同八月二十二日歌合當座

朝紅葉

横雲は明けはなれゆく山の端にのこる紅葉も秋風ぞ吹く

夕搗衣

秋風もゆふべやさむくなりぬらむうちもすさめぬあさのさ衣

深山霧

槇の葉のつれなき色はなかりけり秋のみやまの夕霧の空

鞆中戀

かぎりあればおなじ都の空だにもへだてて遠き心ならひを

海邊戀

消えかへりうはの空なる煙だにこと浦風はいふかひもなし

同二十四日當座

夕草花

みしまのや夕露おもく吹く風に色の千種の花ぞめのそで



古寺月

をはつせやひはらが月は晴れにけり入相の鐘に秋風ぞ吹く

空山雁

山里の峯の木葉や散りぬらむまくらに近き秋のかりがね

寄雨戀

大方のながめにまさる袂かな軒のしのぶの秋のむらさめ

寄石戀

わたの原荒磯波の岩のうへによせくる玉の碎けてぞふる

寄草戀

忘草露ふかきよの夢路にやかよへる袖のひるよしもなき

同日當座歌合

憚老年戀

菊の露ひるはおもひに消えながら老をせかるるみづからぞうき

被妨人戀

あはれまたものや思ふと問ふ程の人にしられぬ夕暮もがな

同比當座

山 秋

時雨かどふりそふ秋の木葉にもすこしは曇る山の端の月

寄川戀

あはれなほ岩きりとほす山水も下のこころはよどむものかは

寄月述懐

見てもまづひさしくなりぬ百敷やむかしも遠き雲の上の月

同九月十三夜及深更定家家衡等卿など参りて今

夜月いかが空しくはなとすすめ申ししかば於清

涼殿東廂詠之 當座

月前竹

順徳院御集



秋風は雲ばかりをやいとふらむ竹もおとせぬ庭のつきかげ

月前松

月のすむ玉松が枝の夜半の露おのがひかりも秋ぞそひける

同十月十六日當座

山時雨

たつた山一村残るもみちばにあかずしぐるる峯のこがらし

江上月

里のあまのよるやく鹽の煙にやなほにごりえの冬の夜の月

曉更衣

しののめの道のささ原露わけてぬれゆく袖と人にしらせむ

同十一月朔日會

空山月

あかつきの霜ふきはらふ松風にひとりはさえぬ山のはの月

遠村雪

かきくらす野山の末の雪のうち一村見えてたつ煙かな

寄蘆戀

人しれぬ浦わの蘆のかれしより幾夜の浪にむすばほれなむ

同比不廻時日詠七十首 其中二十首入火中

のどかなる春のあしたの宿ごと人への心もあらたまりけり  
下もゆる草葉も見えぬあわ雪に跡ふみつけて若菜つみけり  
我が宿のまがきの梅のはなざかり道ゆく人のこころをぞみる  
うぐひすの羽風ならでも匂ひけり軒端の梅のはるの夕ぐれ  
さは姫の柳のかづらいくかへり春はみどりの波もとくらむ  
待ち出しもなに山のはをいそぐらむ更くれば霞む春の夜の月  
はしだてのくらはし山のさくら花雲吹きませて春風ぞふく  
咲きにけり遠やまもとの櫻花いづれあるじと山はわかねど



かへるかり曉としはわかねども幾夜ねざめの人かきくらむ  
 櫻花をしまぬ人のころにはのどかにぞ吹く春のゆふかせ  
 小山田の苗代みづにあめ過ぎてうきぐさがくれ蛙なくなり  
 雨ふれば池の藤波かげそへて松の葉ごとにかかるしらつゆ  
 くれてゆく春の日數も花の色もうつりはてぬる夕暮のそら  
 きのふかもくれにし春のかたみだに夏の衣に風もいとはず  
 ゆふづく日入相の鐘のこゑくれば初瀬の檜原風ぞすすしき  
 ふしみ山さみだれしげし里人の衣ほすべきひまもなきまで  
 あかつきの空しづかなる月影に行く方みゆるほととぎすかな  
 夢なれやふかき夜どこのほととぎすただ一聲の村雨のそら  
 水無月のはつかあまりの月影に里なれ過ぐるほととぎすかな  
 みそぎする川邊の草の白露も秋をかけたるいろにみえつつ  
 夏と秋とゆききの岡のよるの雨に萩のふるえは色かはりけり

秋たちてあしたの原におく露や我がころも手の色やそむらむ  
 けさはまだ秋としもなき袖の色をおもひとがむる萩の上風  
 吹く風を空にしれとやあまびこの音羽の山に秋はきにけり  
 秋はきてなれし扇も置く露のいろよりつらき風のおとかな  
 をかやはふ山下風に鳴く鹿の聲のみだれておけるつゆかな  
 大方の秋のねざめやかこつらむおのれおもひの松蟲のこゑ  
 山川のいはまの波のはやければ空ゆく月もやどりかねつつ  
 二見がた月すむ波の玉くしげ明けなば秋のいろやなからむ  
 ときは山よそにしぐるる秋風の身にしむ色はまつぞ見えける  
 夜半のしも夕のあめも秋ふりてさも色しらぬ軒のまつかな  
 立田姫紅葉のころもしぐるれば山風にこそいろまさりけれ  
 秋の行く道のしるべはなけれどもしぐるるかたや冬の山風  
 しがらきの外山の雲の夕時雨冬のけしきに散る木の葉かな



大井川ふせぐいかだも水こえて木の葉残らぬ山おろしの風  
 やどりこし露のよすがもあれはてて風のみすさぶ蓬生の月  
 ふじのねに冬はそふべき煙だにそれともみえず降れる白雪  
 雪降ればおのがね山やあれぬらむ宿の梢につぐみなくなり  
 山人のかよふばかりの道もなし吉野の奥につもるしらゆき  
 蘆鴨のすだく野澤のわすれみづたえまたえまに氷るころかな  
 あづさ弓いそべの松のいく世へて時雨もしらぬ色か契りし  
 都にはよそにおもひし山の端のなれける秋の月のかげかな  
 故郷は露のよすがにあれば果てて蟲の音しげき淺茅生のつき  
 青柳のいとかの山のさくら花みやこのにしきたち歸りみむ  
 立田山有明の月のながき夜はゆふつけ鳥もおもひかぬらし  
 はま萩をいもこひしらにをりしきて幾夜かいとふ袖の潮風  
 身をしれば賤のをだ巻おのれのみよをふる道はさやは苦しき

世の中はとてまかくても過ぎにしを思ひいでなむ思出もがな  
 世にたてば人のつらさもうきことも思ふよりこそ思なりけれ  
 ひさかたの空ゆく月に契りつつなほいくとせの秋もかざさず

又同比

題しらす

しのぶ山下はふ葛の下にのみえやはゆふべの露ぞうつろふ

同比當座

夏

筑波ねのしげきの木の間影はあれど秋にはかはる夏の夜の月

題不知

いかがせむ蘆の八重ぶきつつめどもむなしき空にあまる煙を

同十月十日夜夢或人書に此歌かきて送れる

あはれなりたえぬ涙のかくばかり色かはるまで思ふ心は



同五年三月當座

山花を

山のはや櫻にこめて見えざらむ花より出づる有明のつき  
しをりせしは山が峯のさくら花かへさは雲の色ぞ涼しき

同四月二十日内内北野宮歌合

羈旅時鳥

ほととぎすみ山ながらの初聲を苔の枕にあかつきぞきく

川邊夏草

夏草川カやあさ瀬になびくにこ草のにごらぬ水の色ぞ涼しき

寄松述懐

今ぞしる北野の松のかげしげみあまるは神のめぐみなりけり

同比又進同宮歌

ひとすぢにたのむも神のちかひぞと思ふもうれしゆく末の空

同六月二日當座會

山春花

しをりする人もまれなる奥山にいたづらにのみ花や散るらむ  
おしなべて花やさかりに過ぎぬらむ春風ならぬ山のはもなし

水夏月

手ずさみにむすばむと思ふ池水にかねても月のやどりける哉  
見渡せば行くせも遠きやまみづに空も涼しくうつるつきかけ

野秋風

むすびけむたが手枕としらねども野原の薄あき風ぞ吹く  
百草の花ふきしをる秋風にその色となき野邊のしらつゆ

同二十四日歌合當座

夕風五首

百敷やみかきの竹の夕風にをさまれる代の程やみゆらむ



秋風もわきては染めぬ梢より夕日うつろふ西のやまのは  
くれかかる夕かげ草の露ながらむすぼほれ行く秋の初風  
をりしもあれ入相の鐘のおとづれて軒端の松に秋風ぞ吹く  
野分する小野のしの原たれゆゑに亂れておける秋の夕露

曉月五首

草の葉の露のやどりのあだなるになほをしまるる有明の月  
かへるさのたが涙とはしらねども月にみがける道芝のつゆ  
寝ざめする有明方の月影をこころならでもながめつるかな  
あかつきの空もしづかに行く雁の羽うちかはすむら雲の月  
しののめの夕つけ鳥のなく聲になほ残りある秋の夜のつき

同二十五日當座

野亭鹿

宿近きのべの草葉の秋風を鹿の音ながらうつしてぞきく

行路霧

明けぬとて朝立つ人の聲すなり霧のあなたやとまりなるらむ

寄水戀

おもひ川岩まがくれに行く水のわきかへるともしる人ぞなき

同七月一日依日蝕人人參籠して歌合に

關路早秋

夏秋のゆききをしのべあふさかのゆふつけ鳥の曉のこゑ

野草露滋

いつまでか道ゆき人の結びけむ露にまかする小野の淺茅生

同八月十五日夜今夜庚申於殿上人人詠歌出之當座

座

世をてらすあまねき空の光にも月をぞ千代のかげにたのまむ  
さよふけて空もしづかに行く月のやすらふほどの村雲もなし



ながめつつ月のかつらの紅葉ばは時雨せぬ夜ぞ色まさりける

同十月九日於仁和寺殿人人歌つかうまつりしに

當座昨日御方違今日逗留也

清水せくかり田の面の冬がれにおのれもうすき山の端の月

嵐山しぐれや近く通ふらむみやこにもにぬ庭のもみぢば

同十六日當座歌合

冬空月

山の井のかげみし水のこほるより月もさえたる明方の空

朝落葉

吹きしをる四方の紅葉の散りはてておのれもよわる今朝のこがらし

夕殘菊

あまつ星光をそへよ夕暮の菊はまがきにうつろひぬとも

同十七日當座歌合

浦千鳥

月影もたかしの濱のさよ千鳥こゑすみのぼる浦風ぞ吹く

野初雪

あさごほり野澤の水のけぬが上にまたも降りしく初雪の空

寄竹戀

霜さゆるいささ村竹いざやまたしみだにつかぬ色もかひなし

同十八日當座歌合

山亭草

秋だにも人めかれにし奥山になほ冬ごもる道のしたぐさ

海上霞

難波がたむれゐる鳥もおとづれて霞にさわぐ夕波のこゑ

旅松風

旅まくら山路もふかくなるままにきのふの松の秋の風かは



ながめつつ月のかつらの紅葉ばは時雨せぬ夜ぞ色まさりける

同十月九日於仁和寺殿人人歌つかうまつりしに

當座昨日御方違今日逗留也

清水せくかり田の面の冬がれにおのれもうすき山の端の月  
嵐山しぐれや近く通ふらむみやこにもにぬ庭のもみぢば

同十六日當座歌合

冬空月

山の井のかげみし水のこほるより月もさえたる明方の空

朝落葉

吹きしをる四方の紅葉の散りはてておのれもよわる今朝のこがらし

夕殘菊

あまつ星光をそへよ夕暮の菊はまがきにうつろひぬとも

同十七日當座歌合

浦千鳥

月影もたかしの濱のさよ千鳥こゑすみのぼる浦風ぞ吹く

野初雪

あさごほり野澤の水のけぬが上にまたも降りしく初雪の空

寄竹戀

霜さゆるいささ村竹いざやまたしみだにつかぬ色もかひなし

同十八日當座歌合

山亭草

秋だにも人めかれにし奥山になほ冬ごもる道のしたぐさ

海上霞

難波がたむれゐる鳥もおとづれて霞にさわぐ夕波のこゑ

旅松風

旅まくら山路もふかくなるままにきのふの松の秋の風かは



同十九日當座歌合

春 雨

楨もくのひはらの山の朝ぐもり空もみどりに春雨ぞふる

夏 月

ほととぎすなく一聲のほどだにも月よりのちの曉ぞなき

秋 露

草の原うつろふからに白露の秋をおきてや色まさりゆく

冬 風

紅葉ばをあるかなきかに吹きすてて梢に高き冬のこがらし

變 戀

思ひそめし色こそ見えねたけぐまの松もむかしの秋の夕暮

同二十二日當座

水郷冬

立田川ながれやみにし紅葉ばのいはまに残る色ぞすくなき  
風さむみよるやあじろのひをへつつ衣手うすし宇治の里人  
たかしまやあとがは波の朝霧に身をかくろへて千鳥鳴くなり

同日探題詠歌 當座

夕ぐれの露をも露とみゆばかりあきかせならぬくさの葉もなし  
むすびあぐるたらひの水の程なきに空までうつる夏の夜の月

同比當座歌合

朝千鳥

伊勢のあまの朝げの煙空にのみ聲も消えゆく浦千鳥かな

夕川雪

夕日さす遠き山べはしぐれつつ谷の小川にふれる白ゆき

夜爐火

山がつの柴をりくぶる名残とやわづかに残す夜半のうづみ火



言出戀

しらせては思ふばかりの夏草のふかきみだれは露もかはらず

絶久戀

忘るなよそをだに後のなぐさめに眺めし月もかぎりこそあれ

齋宮群行の事を思ひいでて

行く末も照す光の長月につげのをぐしはさしはなれにき

同十一月四日歌合

冬山霜

敷島やみむろの山の岩こすげそれともみえず霜さゆるころ

冬野霰

武藏野の草はみながらうづもれて霰に残るささのおとかな

冬關月

風さゆる夜半のころもの關守はねられぬままの月やみるらむ

冬川風

山川の木の葉の後のうす氷これもかけたる風のしがらみ

冬海雪

風さむみ日數もいたく降る雪に人やはをらむ伊勢の濱萩

冬夕旅

ぬれきつつとふべき山の夕暮もおなじ時雨の末のしらくも

冬夜戀

冬草の枯れにし色はかひもなし人のこころのながき夜の霜

同夜當座

深夜氷

ふかき夜のあらしもさえて行く舟の跡よりこほる冬の池水

寄爐戀

幾夜かはさてもふせ屋に埋む火の消えぬ思はあるかひもなし



同二十一日當座歌合

浦邊雪

明石がた潮風はらふ波の上につもらでさゆる雪のいろかな

川千鳥

友千鳥よるべやしらぬもののふの八十うち川のあけくれの空

羈中月

あまさかる道の山風さゆる夜の衣手うすく月やすむらむ

同十二月一日は松尾社行幸也朝は晴れて自路頭

雪下桂河の浮橋渡程樂詞雪色繽紛而徐及黄昏景

色面白くてよめり

ふじのねを雪のふぶきに吹きませて暮るるも白き瀬瀬の川波

さて御社にいたりて

けふとてやまれにみゆきのしるしとも松尾山にかかる白ゆふ

同六年二月二十一日内内歌合

關路曉霞

春のきるころも手白し東路やかすみのせきのあけぼのの空

野外朝鶯

朝まだきすそ野におろす花の香を風のたよりに鶯ぞなく

山中夕花

夕月夜空ふきはらふ山風に雲もまがはで散るさくらかな

旅宿春月

こしかたのさかひやいづこ跡もなし朧月夜のさやの中山

春夜忍戀

春の夜のはかなき夢も通ふらむしのぶの里は道遠くとも

同三月日吉行幸の時

けふぞみる立つ白波の音にのみありとききこし唐崎の松



志賀の浦や山のは遠く見渡せば波の上より消ゆるしら雲

同四月一日内内以參議定高朝臣伊勢へ進物之次に詠十五首和歌

進之於寶前燒之由仰了仍不注之。

同五月晦日内内歌合

春戀

うぐひすのなくや涙のかごとにておのれ染めゆく花の下露  
おもひあまりながむる空の浮雲に曇りはてたる春雨ぞふる

夏戀

おのづからむすぶ契も夏川のうたかた人に消えつつぞふる  
五月雨に淀のわかごもこす波の下のみだれは知る人やなき

秋戀

秋風のすゑ野のすすきひとかたに思ひさだめぬ戀のみちかな  
白露のおくとは嘆くよひよひにぬれていかなる袖とかはしる

冬戀

紅葉ばをみなそめはてし夕時雨人のこころになほやのこらむ  
降る雪はしのぎもあへぬすがのねの長き幾夜を思ひきえつつ

旅戀

都にもよそなる人の面影をしたはぬ旅になにうらむらむ  
忍ばじよしらぬ野山の旅枕つつむばかりの人目だになし

同七月七日當座

七夕のうはの空なる契にも秋のこよひをいかで知るらむ

同十二日當座

雲間月

おしなべて秋の空ゆく村雲も月のあたりの色はわきけり

庭上露

染めわたす草葉もしらぬ庭の面にいたづらに置く秋のつゆかな



又日當座

秋朝風

萩が花下葉うつろふ朝露に袖もほしあへず秋かせぞ吹く

秋夕草

山の端は時雨もまだき秋の色を草葉にそむる夕づく日かな

秋夜戀

秋の夜のながきかたみのかひやなき別れしままの山のはの月

同八月十三夜始於清涼殿詠池月久明群臣應製臣

上始于今夜 題者右大臣序同讀師同講師定家朝

臣下講師範時

池水にみぎはの松のうつるより月も千年のかげやそふらむ

同九月二日當座

深夜雁

さ夜深き雲井の雁の羽風より山の端はれて出づる月かげ

曉秋風

いづかたに明けゆく雲を拂ふらむふきも定めぬ秋のこがらし

朝紅葉

立田山朝おく霜のけぬが上に時雨をそへて染むる紅葉ば

田家霧

我がかどのいほしろ小田の朝霧にむれる鳥も友迷ふらし

旅擣衣

草まくらむすびもなれぬ初霜にこの里人はころもうつなり

同此様様題にて人人歌つかう奉りし次に 當座

七夕を

ともしづま行きあふころになりにけり雲井に見ゆる天の河波  
天の川うつろふかたもしらねどもこぞのわたりに秋風ぞ吹く



彦星のけふ待ち得たるえにしあればわたればぬるる天の羽衣  
天の川夜半のむらさめまでしばしかへさの舟に水まさるべく  
夕暮のあき風ちかくきこゆなり天のかはぎりいまやはるらむ  
ひさかたの星あひの空もくもりなし天の戸わたる秋の夜の月  
幾秋のほしあひのかげをうつしても雲井にちぎる宿のいけみづ

同十三夜會

秋山月

しらかしの葉におく露はおもれども山路たどらぬ月の雪かな

秋野月

はし鷹のとがりのま柴ふみならし歸る野原に出づる月かげ

秋庭月

心あらばゑじのたく火もたゆむらむ今宵ぞ秋の月はみるべき

同二十五日當座詩歌合

秋歌

霜さゆるまがきの萩の色ながらうつろひよわる松蟲の聲  
瀧の上の御舟の山やしぐるらむくれなるおろす水の白波  
をぐら山すそ野の里の夕煙宿こそ見えねころもうつなり  
ながむれば衣手さむし長月のありあけちかき山のはの月

同九月盡當座

雨

暮れかかる秋を惜まぬやどやなきくるは涙にうちしぐれつつ

庭菊霜

うづもれぬまがきの菊のにほひかな霜より外の色はみえねど

冬山朝

はつせ山明けぬる雲は跡もなしゆきくもにこもれる峯の月かげ

冬海夕



冬の日のなきたる沖の夕千鳥遠ざかりゆくかざりをぞみる

寄風祝

幾千世をあまつ雲井にちぎるとも人にしらする庭の松風

一葉にかきて

思ひそめし心の色は時雨にもあらはす程の言の葉ぞなき

閑院南庭月を見て

庭の面は松より外のくまもなし真砂も白くすめる月かげ

あまたよめる中に

我が身から人のつらさもありやとて心のとがをもとめわびぬる  
よしさらば數かくばかりなりもせよ思はぬ人を思ふなみだは  
侘びはつる現のうさやなれにけむ思ひねならぬ夢をだにみず  
おろかにぞ人のつらさに歎きけるむかし結べる中のへだてを  
身をつみて歎くこころを思へかしたれも見らむ夕暮のそら

承久元年正月二十七日會

松上霞

見渡せば霞ぞたてる高砂の松はあらしのおとばかりして

翫梅花

あかなくにをれるばかりぞ梅の花香を尋ねてや鶯のなく

同間二月五日内内八幡宮へ遣す歌合

雨中柳

白露のかかれる枝の玉やなぎしづくもしげき春雨ぞふる

月前霞

あしびきの山のはまではかすめども空よりはるる春の夜の月

寄春雜

八幡山高き峯より照らす日の春のひかりに身をまかせつつ

同八日鳴社歌合



朝野董

朝日さす麓の野邊のつば董行くてにつまむ露しげくとも

水邊鶯

浪かくる岸の櫻の花ざかりあらぬさまなるうぐひすの聲

社頭風

神がきのよもの木蔭を頼むかなはげしきころの嵐なりとも

賀茂歌合

曉山櫻

山ざくら花より外の常磐木はありとも見えぬ春のあけぼの

浦歸雁

こしの海の浦わの波もあるものを花なき里と雁歸るなり

同比當座歌合

春風

やだの野の雪間の草の淺みどりなびかぬ色に春風ぞふく

春雨

池水のみぎはの柳つゆ散りて浪にしらるる春のむらさめ

春月

春はなほかすみにけりなひさかたの月のかつらも色變るまで

春雪

かすが野の若菜も白くふる雪に春の衣はぬれぬ日もなし

春野

誰れしかも野邊に心のあくがれてそこともいはぬ花を見るらむ

春水

春の田の苗代水にせきかけて谷の小川はゆきなやむなり

春山

白雲や花より上にかかるらむ櫻ぞたかきかつらぎのやま



春里

山ぶきの花のしがらみかひもあらしとまらぬ春の井手の里人

春戀

いぶき山もゆるおもひの煙をもかすめるころはしる人もなし

春祝

神風や天照るかげの春の日に長きちぎりをなほたのむらし

同二月二十二日當座歌合

深山春

奥山の岩根の櫻いたづらにひとをもをしまぬ花やちるらむ

夕歸雁

夕まぐれ空もみどりに行く雲のたえまに見ゆる春のかりがね

水邊秋

山川の岩ゆく波のわきかへりしばしはよとむ秋のみちば

朝野鹿

色かはる野路の萩原あさなあさな露分けなるる小男鹿の聲

被忘戀

しられてのかひやなぐさの浦にはすみるめをよその袖に懸けつつ

曉更戀

思ふともしらでや人の眺むらむわれのみぬるる有明の月

同十八日題をさぐりて讀之 當座

遠山櫻

きのふまで雲井にみえし足曳の山もあらはに散る櫻かな

隔霞戀

しられじな思はぬ中は春がすみへだつる野邊にもゆる若草

同二十三日當座歌合

早春朝



梅がえにけさふる雪はかつ消えて残るにほひを春風ぞ吹く

夏曉更

よひのまは結びし宿の池水に涼しくすめるありあけの月

暮秋夕

草も木も枯れゆく色にさびしきは外山のいほの秋の夕暮

冬深夜

さよ深き峯のあらしにおどろけば軒端の松に霰ふるなり

羈中月

月影もくるればやどるささの葉を幾夜の露に結びきぬらむ

嫌人忍戀

忍べただしづのをだまきいやしきに通ふはしたの心なりとも

老後初戀

身を秋のおいその森の夜半の露はじめてそむる色をみせばや

曉時鳥をききて

かへるさの有明の空の時鳥いかにながめていかに聞くらむ

同比當座

春

住吉の松のたえまの夕がすみよすともみえずおきつ白波  
たれかまたあはれと思はむうぐひすのなく山陰の春の夕暮

秋

まれにきて心ぞとまる山里の霧のたえまのあさがほの花  
嵐吹くを野のしのはら音さえて霜にさやけき秋の夜の月

同七月百番歌合

野徑霞

夕月よかすむ末野に行く人のすげの小笠にはる風ぞふく

深山花



みよし野の山のあなたの櫻花人にしられぬ人や見るらむ

暮春雨

花もみな散りにし山の深みどりをしまぬ色に春雨ぞふる

曉郭公

あかつきとおもはでしもや時鳥まだ中空の月に鳴くらむ

水懸草

せをはやみ岩まも細き谷川に草のかけたる水のしがらみ

秋夕露

さざ波にてびきの絲もたゆむらむ草のつゆ吹く秋の夕風

聞擣衣

秋風はいたらぬ袖もなきものをたが里よりか衣うつらむ

庭紅葉

山里はとはぬ人目ももみちばも枯れてうつろふ秋の夕暮

冬夜月

山風にしぐれや遠くなりぬらむ雲にたまらぬありあけの月

杜間雪

明けわたるけしきの森にたつ鷺のうは毛も深く雪はふりつつ

同八月十六日よめる

百敷やけふひく駒のかけそへて雲井の月は千世もすむべし

同比當座

川曉月

あけぬるか遠かた人はこえ過ぎて河瀬の霧に月ぞ残れる

聞秋雁

こしちより花の都の旅なれや宿もさだめず雁ぞなくなる

同九月六日當座

寄霞戀



我が戀は竹のは山に降る霰いくよを過ぎてつゆと消えなむ  
題しらす

我れゆるにおのが心をくだきつつ人のとがにも思ひけるかな

同七日内内進日吉歌合

深夜秋月

ふけゆけばくらき軒端のかげもなし庭を盛の秋の夜の月

遠山曉霧

昨日見し山のいづくにかかるらむ霧のすゑなる有明の月

社頭松風

かはらじな春見しままの峰の松音にあらしの秋はありとも

同進十禪師

暮天聞雁

折しもあれ人まつ空の夕暮にたがたまづさの初雁のこゑ

紅葉添雨

秋山のよもの紅葉の夕時雨あすさへふらばまつぞ残らむ

湖上眺望

雲霧のをさまる秋のあさなぎもなほ山遠ししがの浦なみ

同十月六日よめる多社行幸次日なり

寄社頭祝

いなり山きのふの暮の夕づく日さして千年のかけぞしられし

同十月十三日左大臣九條亞相向大井川邊翫紅葉

之由有風聞仍以瀧口平貞繼遣之

もみち葉は昔の色にかはるともふるき流の跡は見ゆらむ

御かへし 左大臣道家「紅葉ばも入江の松にふり

ぬれど千世の流の跡はみえけり」

付使歸參進別一首書一葉いにしへのみゆきもし



るしあらし山木の葉ふりしく跡をみるにもしとよ  
みてたてまつりけるにまた御かへし 歸洛後遣  
之

嵐山木の葉ふりしく音にのみ聞けばかひなき千代を見るにも  
題しらす

人も守る心のせきをたれすゑてまたあふ坂にみちまよふらむ  
たえはつるさの中川なかなかにわたりか初めし身をぞ恨むる  
眺めわびぬ見はてぬ夢のさむしろにおもかげながら残る月影

承久二年二月十三日會

春山月

初瀬山ひはらくもる月影を霞のとがにたれながむらむ

野外柳

夕づく日をかた野邊の柳原かすみにあまる色ぞさびしき

同三月當座

夕桃

夕づく日したてる山の桃の花まじる青葉ぞそれと見ゆらむ

待戀

なほざりに契りしほどもみゆばかり更けゆく鐘を心にぞ待つ

同二十三日當座歌合

曉落花

旅衣ねざめて聞けば山風のはらひもあへず花やちるらむ

夕歎冬

夕月夜谷かげくらくなるままに青葉ぞまがふ山吹のはな

暮春霞

野も山も春のみどりになりはてて空の色なる夕がすみかな

絶恨戀



人はよも思ふらむとも思ひ出でじ我が身にしらぬ心ならひに

欲忘戀

よしさらば忘れむと思ふ心よりみし俤もおどろかしつつ

同二十四日始歌合當座

鶯歸谷

山人もくるれば歸る谷の戸に花をともなふうぐひすの聲

朝藤花

東路のときはの橋の藤の花あさゆく人はそでにほふらし

三月盡

おのづから花は梢に残るとも今日より後の春はとまらじ

厭忍戀

忍ばずはたのむ心もありなまし逢ふ夜は人のいつならずとも

惜曉戀

一たびはきかすがほなる鐘の音もよほす袖におき別れつつ

同四月二十八日於仁和寺殿當座會

水邊夏草

夏山の草のしげみのさざれ水ありとかはづの聲ぞきこゆる

夏夜待月

みじか夜はまつに名残の程もなし明けての後や山のはの月

同八月十五夜會

待月

出でぬより光はにしになりにけり松のあなたの山の端の月

見月

かぞへしる人なき山の山人も月に今宵やおもひいづらむ

惜月

をしむらむ人の心をなく雁のこゑするかたに月ぞ残れる



同比詠百首題期詠 和漢期詠は多於百仍少略之縮百首春秋二

十首夏冬十首雜四十也

立 春

庭の面にあふぐ雲井の天つ星空ものどかに春はきにけり

早 春

しがらきのまきの柳山春くれば道ふみそむる雪のした草

春 興

もろこしの春のみ舟ぞ思ひやるやまとしま人花かつらせり

春 夜

梅が香を霞の袖にこきませておぼろ月夜にはる風ぞ吹く

子 日

鶯はまだおともせでひくま野の松のはつねに春やみゆらむ

若 菜

かへるさやちりかふ花にまがふらむ若菜つむ野の春のあわ雪

三月三日

みちとせの花にうつろふ空はれて行くせたどらぬ春の盃

暮 春

散りすぐるみ山がくれの花の枝にまた色そむるよもの春雨

三月盡

吹く風もいとひし程ぞ櫻花あすはありとも春のものかは

閏三月

一年に二たび春ををしむとやまたもやよひのうぐひすの聲

鶯

うらわかみ春ともみえぬ梅が香におのれうつろふ鶯の聲

霞

見渡せばかすめる波のはてもなし春の朝のしほがまのうら



春雨

浅みどり四方の草木にあらはれて雪にまじらぬ春雨ぞふる

梅

にはひあれど遠方人もこととはす籬の上の梅のはつはな

柳

さは姫の手ぞめの絲の玉やなぎつらぬきとめてかへる旅人

落花

初瀬山かすめる空もくもる日の花の蔭なく吹くあらしかな

躑躅

さきぬるはとほつの濱の岩つつじ花もこえてや山を行くらむ

款冬

山ぶきの花の蔭ゆく水清みふかくもうつる春のいろかな

藤

これもまたちりぬる花の名残とや水なき松にかかる藤波

更衣

櫻色の春の衣はぬぎかへてなほよそならぬ庭の卵のはな

夏夜

夕立の雲もさながらくるる日の更けゆく空に軒のたまみづ

端午

きのふより軒ばにふける草の名のあやめもしらぬ五月雨の空

納涼

山風の吹くともなくて涼しきは夕日がくれの森のした水

晩夏

鳥の音をききあへぬまに明けしよのやや残りゆく六月の空

蘆橋

九重の庭のたちばな匂ふなりむかしの袖はたれとしらねど



蓮

風により蓮のうき葉のうちなびきとまれる水に宿る月影

郭公

鳴きすてよ夕暮がたのほととぎす思ひもいれぬ人もこそきけ

螢

夏蟲は人をみぬめの涙かはつつめど袖にかげもたまらず

首夏

峯の松春より後のひとしほは四方のこすゑの色ぞそめゆく

立秋

草も木もきのふの露の色ぞかし人のこころに秋はきにけり

早秋

秋きてはけふ三か月のいつの間にそむる一葉の色にみゆらむ

七夕

七夕のあまの羽衣まれにのみけふの今宵を思ひけるかな

秋興

月だにもやすらひ出づる山のはを梢もかかずこゆるかりがね

秋晩

わが袖に夕暮ならぬ秋風は吹きもやすらむ露ははらはす

秋夜

世の常の松の嵐のけしきかは秋よりほかに月はみしかど

月

庵むすぶみ山の秋の淋しさもすむ人からの月や見るらむ

菊

このねぬる霜よの床の朝戸出に秋もうつろふ庭のしら菊

九月盡

行く秋は今宵ばかりの山の端に有明ながら月や出づらむ



女郎花

秋の野の尾花にまじる女郎花草のたもとに色ぞわかるる

萩

秋風に雲井の雁のなかぬまもこころとおける萩のしら露

蘭

やどりせし人月の形見も残りけり露にしをるるふぢばかまかな

槿

白露もむすぶ程なき下ひもをただ時のまのあさがほの花

紅葉

三室山木木の紅葉にしぐれつつおのが色なる下草もなし

雁

みどりなる夕のそらの秋風に雲もへだてぬはつがりの聲

蟲

くれなるのあさはの野らの夕露にふり出でてなく鈴蟲の聲

鹿

秋になく男鹿の角のつかのまも涙かからぬ草の葉ぞなき

露

風わたるすがのあら野の夕まぐれ露の限もうづらなくなり

霧

山川にはれゆく霧やしをれけむ朝日にぬるるまへの棚橋

搦衣

露霜にしづがわらやの隙はあれどたゆまぬ聲に衣うつなり

初冬

夢のうちに花も紅葉も散りはてて昨日と思ひし冬はきにけり

冬夜

神無月しぐるる頃のよなよなもつもる木の葉の色にみえけり



歳暮

宿ごとによをふる道ぞ急ぐなるあすの花をばまつとなけれど

爐火

山がつのうづみ火近きかやむしろ花のあたりやしき忍ぶらむ

落葉

ちりつものよもの紅葉の冬の色におとづれよわる峯のこがらし

霜

あしたづの霜の上毛のけぬがうへに重ねてさゆる明方の空

雪

枝かはす松をたよりに降る雪はあからさまなる谷のかけ橋

氷

人の身はならはしものも哀なり氷をくだす冬のいかだし

霰

あしべなる萩の枯葉に音さえてむれるる鳥に霰ふるなり

佛名

となへつる四方の佛のかずかずに三千世もなのれくもの上人

風

聲たてず治まれる世の風にこそよもの草木はまづなびきけれ

雲

薄くこくかかれる峯の雲の色にかさなる山の數ぞみえける

晴

風ふかぬみどりの空に飛ぶ鳥のあるかなきかに遠ざかりつつ

曉

長き夜のみはてぬ夢もおどろきぬ勝りてをしき山のはの月

松

夕日さす嶺のうす雲たなびきてむらむらうすき松の色かな



竹

秋は露おつるばかりふかぬよの月になみよる庭のくれたけ

草

おしなべて民の草葉におく露もめぐみありとや秋風のふく

鶴

朝ぼらけ風にきほひてきこゆなりたが住む宿のたづのもろ聲

猿

月の夜のみ山がくれに猿の聲たがたしきの袖ぬらすらむ

管絃

ふえの音を松の嵐に吹きそへて治まれる世の聲をつぐなり

文詞

時雨だに秋より外の色はみずちぐさにそむる人のことのは

酒

入日さす杉のたちえに夕かけてみわすゑまつるみねの里人

山

神路山たのむ木蔭のしげければふるとも雨にぬれむものは

水

谷川におちかた人ぞ渡るなるにこりておつるみねきの白波

禁中

數ふれば十年の秋はなれにけりさやかにてらせ雲の上の月

故郷

手もふれで月日やへぬる故郷のしげき草葉に秋風ぞ吹く

古宮

みよし野の吉野の宮はふりにけり松も昔の松やすくなき

仙家

いにしへに住みけむ人の跡なれやゆか吹き拂ふほらの秋風



田家

さびしさも思ひなれてやながむらむ田中の庵の秋の夕ぐれ

隣家

うばそくが行ふ道もきこゆなり近き籬のへだてばかりは

山寺

たれかなほ心もやどもすみなれて横川の水に月を見るらむ

佛寺

わしの山かくれし月をうつしもてくらき道にやなほ頼むらむ

眺望

みるままに雲と波とはわかれつつ明けゆく空の吹上の濱

餞別

わかれ路にしたふ涙をかたみにてあはむ日までと契る月かけ

行旅

越えくるる山路の末に宿はあらし夕日に遠きみねの白雲

帝王

大かたにひとりある人の朝夕に仕ふる道はなほもつきせじ

親王

吳竹のそのふの露のしげければ宿かる月の影ぞあまねき

丞相

みかさ山みねの梢にかげなびく星の光はくもらざらなむ

無常

さてもまたあらましかばと數ふれば手にもたまらぬ人ぞはかなき



# 順徳院御百首

黒點御鳥羽院朱點定家卿  
判詞定家卿

## 春二十首

黒點朱點 風わたる池の水のひまをあらみあらはれいづる鴉のしたみち

風渡る池の水解けて、鴉の下道あらはるるよし首尾相叶、姿詞克調候歟。

黒點朱點 けさの間はひかりのどかに霞む日を雪げにかへす春の夕風

朝陽雖屬晴、晚風猶吹雪の由尤宜候。但聊存旨候之由先度申上候。

黒點朱點 ふりつもる松の枯葉のふかければゆき間もおそき谷の下草

枯葉の松ふかく埋て、雪間の草遅く見ゆる心、谷の草葉下にうづもるる景

色あらはにうかびて、感情殊に深候。

朱點 難波がた月の出しほの夕なぎにはるの霞のかぎりをぞしる

月のでしほのなぎわたりて、霞のかぎりはるかにみゆる心また殊勝に候。

順徳院御百首



夢覺めてまだまきあげぬ玉だれの隙もとめても匂ふ梅が香

珠簾未卷、羅幕猶垂、梅氣求隙、枕席帶匂之由、其心妖艶、其詞美麗候。

たか鳥やあと川やなぎ風ふけばぬれぬしづ枝にかかる白なみ

此第二句廢忘不覺悟候。始末隔凡俗、至愚難覃候。

浅みどり霞のころもふく風にはつるる絲やたまのをやなぎ

霞の衣風にみだれて、柳の絲玉をつらぬく心、見どころ多く候。玉のを柳の

仔細は先度申上候。

夕霞さえゆく雁やくも鳥のあやおりみだる春のころも手

かすめる雁の翅、雲鳥のあやおれる心詞殊に珍しく候。

歸る雁なみだや秋にかはるらむ野邊はみどりの色ぞそひゆく

萩の上の露にかへて、緑の野べをそむるよし、また古來よみのこし候ひけ

る風情、興味無極候。

秋かせにまたこそとはめ津の國の生田の森の春のあけぼの

生田の森の秋の歌、清胤僧都が弟子おほく耳に満ちて候へど、春の曙はじめて驚愚眼候、催感情候。

花鳥の外にも春の有りがほにかすみてかかる山のはの月

鶯花之樓閣、錦繡之山川にあらずとも、朧月の景氣、煙霞の幽趣、見どころまさり候歟。

雪とのみふるの山邊はうづもれて青葉ぞ花のしるしなりける

雪とのみふるの山邊はうづもれて青葉ぞ花のしるしなる心又めづらし

く其興候歟。

ちりまがふ四方の櫻をこきませてぬきもとどめぬ瀧の白絲

四方の櫻をこきませて、ぬきもとどめぬ瀧の白絲の面影、また艶に見ど

ろ多候歟。

むすびあへぬ春の夢路のほどなきにいくたび花の咲きて散るらむ

須臾夢中の開落花の色、一生八句之夢、紅榮黃落之悲、おもひよそへられて、



溥陽之青彩墨染にあらたまり候。

<sup>黒點朱點</sup>春よりも花はいくかもなきものをしひてもをしめ鶯の聲

かやうにやすらかにもとめ出だし、くさりつづけ候はでも、三代集以上の姿は候ものを、誰もかたはらくるしく好候輩、かかる心の候へかし。

<sup>朱點</sup>ちくま川春行く水はすみにけり消えていく日の峯のしらゆき

西行法師が清瀧川うるせく仕候由、年來おもひ給ひ候、春行くみづはすみにけり消えていく日の峯の白雪、美麗の姿其隔に候ひけることを、誰も不仕候。面白く候。

<sup>朱點</sup>あし鴨のはがひの山の春の色にひとりまじらぬ岩つつじかな

はがひの山、青字あらはれ候はで、紅躑躅のまじらぬいろにきこえ申候。殊染心肝候。

<sup>朱點</sup>河の瀬に秋をや残すもみぢばのうすき色なる山ぶきの花

紅葉の薄色、古來秋冬によみのこし候。不可思議に候。

<sup>黒點朱點</sup>影しあればをられぬ波もをられけり汀の藤の春のかざしに

五句非新造、風情はじめて出来候。かくの如くの事殊にありがたく令悦目候。

<sup>朱點</sup>なげやなげ忍ぶの山の呼子鳥終にとまらむ春ならずとも

「つひにとまらむ春ならずとも」又三月盡に讀み残し候ひける、毎度愚眼をおどろかし候。

夏十五首

<sup>黒點朱點</sup>山城のときはの森は名のみして下草いそぐ夏はきにけり

下句又珍重に候。

<sup>黒點朱點</sup>たれしかも松の尾山のあふひ草かつらにちかく契りそめけむ

此初五文字、亡父の題他門の説相違候。今度出来候。宜くおもしろく候。

夏の日の木の間もりくる庭の面にかげまで見ゆる松の一しほ

風情また興味候。終の句其深趣於愚意近年羅頭之仔細候之間、先度令披見



候。

黒點朱點今こむといはぬばかりぞ郭公ありあけの月のむら雨の空

朱點景氣また如當眼路候。

朱點五月雨の雲井に高きほととぎす月の桂のかげしたふらし

朱點交霖雨之晴雲、暮桂月之清輝、姿調高而難及候。

朱點五月雨はまやの軒端もくちぬべしさこそうき田の森のしめ繩

朱點五月雨のまやの軒端も、杜のしめ繩も、ともにふりにたる事に候へども、おなじしめ繩もかく引きなしてはめづらしく候。

朱點峯の松入日すすしき山かげのすそ野の小田に早苗とるなり

朱點入日のかげ、すそ野の早苗、是もとりなされ候景氣、色をまして候。

黒點朱點ともししてこよひも明けぬ玉くしげ二村やまの峯の横雲

朱點五句三十一字悉秀逸、如擲玉光明照耀殊勝に候。

朱點蚊遣火のけぶりは人のしわざにておのれ曇らぬ夏の夜の月

朱點「煙は人のしわざ」又新造珍重に候。

朱點あかつきの八聲の鳥もいたづらに鳴かぬばかりに明くる東雲

朱點「なかぬばかりにあくるしののめ」これも新らしく承始候。

黒點朱點夕がすみたなびく山の花よりも色の千種にさけるなでしこ

朱點「春霞かすみていにしかりがね」讀上候時似春歌候増其興候。「色の千ぐさのなでしこ」可然と殊勝に候。

朱點かざりあれば富士の深雪の消ゆる日もさゆる氷室の山の下柴

朱點富士の雪みな月望に消ゆる心、氷室の風情又催興感候。

むら雨の雲吹きすさぶ夕風に一葉づつちる玉のをやなぎ

朱點玉の緒柳の仔細は、先度令披露候。

黒點朱點夕立の雲にさきだつやまかせに秋になびかぬ草の葉ぞなき

朱點山風雲にさきだつ、草の葉秋になびく景趣、如眼見候。

黒點朱點みそぎする賀茂の川浪ゆふかけてただすの森にひぐらしの聲



此姿また同前に候。

秋二十首

時黒點朱點しもあれ秋なき色も年波のなかばこえゆくすゑのまつ山

末のまつ山、年波は半こえゆくこころ、また古き物の具新しき寶となれる哉。

さをしかのつれなきつまも有るものをまつを恨の星合の空

「待つを恨の星合」殊勝候。

秋黒點風や千種ながらにみだれけむ花吹きかはす宮城野の原

宮城野の原千種の花みだれあへるとの景氣又美麗に候。「かはす」詞於愚意

聊存旨候。

人朱點ならぬ岩木も更になしきはみつのこじまの秋の夕暮

此三十一字また毎字難抑感涙候。玄之玄最上候。

つ黒點朱點ま木こる遠山人はかへるなり里までおくれ秋の三日月

山樵の歸路、纖月の微光、面影殊勝艶候。

は黒點朱點し鷹のとやののあさぢふみわけておのれも歸る秋のかり人

上下の句相叶、始末の詞相應候。

秋朱點風の枝吹きしをる木のまよしかつがつみゆる山の端の月

姿詞誠にうつくしくつづき候。歌の詞時の景氣、かくこそあらまほしく候へ。

追朱點風にたなびく雲のはやければ行くとも見えぬ秋の夜の月

たなびく雲のはやく過ぎて、暗間の月しづかにすめる心、又染心肝候。

月朱點みよと軒端の萩の音せずばさてもねぬべき秋のねざめを

軒端の萩にもよほされて、床の月れざめさびしき心、上陽の空床四五百回の昔の事まで思ひやられ候。

白露黒點朱點も雁の涙もおきながらわがそでそむる萩のうはかせ

「わが袖そむる萩の上風」もる山の露時雨にはあらで、まぢがき袖の色は、萩



黒點朱點の上吹く風の音にそめらるる心、殊に珍しく艶にきこえ候。

黒點朱點山鳥のうらみも秋やかさぬらむ八重たつ霧の中のへだてに

黒點朱點遠山鳥の尾をへだつる恨も、秋は八重たつ霧にかさなるよし、詞のよせ、こ  
とわりもかくこそ候べかりけれ。

黒點朱點ふしわぶるまがきの竹の長きよになほおきあまる秋の白露

黒點朱點まがきの竹のふしわぶる長き夜に、秋の露猶おきあまりたるこころの、ま  
ことに心肝にそむと申すも、君は千世ませの同じ事にや候らむ。

黒點朱點山里は軒端の松を吹くからに鹿のねならぬあき風ぞなき

黒點朱點かこつべき野原の露の蟲の音も我れよりよわき秋の夕ぐれ

黒點朱點野原の露よりも行宮のいろかはり、蚤のおもひよりも松の臺の風の聲怨  
みて聞え候ことわりに、おしなべての人の袂も、こころつよかるまじくや  
候らむ。

黒點朱點さらしなの山のあらしも聲すみて木曾の麻衣月にうつなり

黒點朱點なぐさめかぬる山の嵐、月のもとにうちばへて候らむ碓の音、星の前の雁  
の翅よりも飛び立ちぬべくや候らむ。

黒點朱點霧はればあすもきてみむ鶉なく岩田の小野はもみぢしぬらむ

朱點風に靡く雲の行くてにしぐれけりむらむら青き木木の紅葉ば

朱點一目みしとをちの村のはじ紅葉またもしぐれて秋かせぞ吹く

黒點朱點谷深き八尾のつばきいく秋のしぐれにもれてとしのへぬらむ

黒點朱點以上四首、詞花如光彩、景氣銘心府、每數感情をもよほし候。

黒點朱點いくとせの秋の別におくれるてふりそふ雪の消ゆるよもなし

黒點朱點五句相續、每字殊勝に候。

冬十五首

黒點朱點もろ人のはなすり衣ぬぎかへて紅葉こきいれし形見だになし

黒點朱點櫻色の衣はかへうきならひに耳なれ候へども、紅葉こきいれしかたみは、  
これやはじめにて候らむ。



鐘黒點朱點の音の霜となりゆく明方やよもぎの露もこほりそめけむ

豊嶺之鐘動霜、閑庭之露爲氷、寒夜之景氣又以蕩意染心肝候。白曉鐘。

冬黒點朱點來朱點てもなほ時あれや庭の菊こと色そむるよものあらしに

隨紅嵐之聲、變紫菊之色、また以美麗候。

み黒點朱點む朱點ろ山秋の時雨に染めかへて霜がれ残る木木のしたくさ

時雨の木葉色おとろへて、霜の下草かへりて顯れたる、冬の山のけしきお

もひやられ候。

吹朱點く風やいくたび道によわるらむみな霜枯のむさし野の原

みな霜枯の野原の、風の聲さへよわれる盛衰あはれに聞え候。

清朱點見がた雲もまよはぬ波の上に月のくまなるむら千鳥かな

清見がた雲もまよはすさえわたりて、千鳥の月にかける翅ばかりくまとなれる面影もつかびて候。

み黒點朱點だれあしの葉末のつゆもこほる夜は忍ぶにすれる鶴の毛衣

しなれあしのかげに鶴の毛衣忍ぶすりの風情も、限しられすや候らむ。

蘆朱點の葉にかくれてすまぬ炭がまも冬あらはれて煙たつなり

蘆の葉にかくれぬ宿も、冬あらはるる煙ふかき跡にも、たちまさりてや候らむ。

山朱點おろし霰ふきしくささの上に友黒イふみ迷ふけさのかり人

霰のふきしく篠の上、芦川の行幸の日も思ひやられて、興感深く候。

駒朱點とめてしばしはゆかじ八橋のくもでに白きけさの淡雪

「八橋のくもで」説説多く候へども、古歌にも詠じ來り候。近年白きと申候詞、あしかりぬべき事には候はれども、未生初學每人毎歌詠候故に、あまり満

耳令厭却之思候。

吹黒點朱點きはらふ雪げの雲のたえだえを待ちける月の影のさやけさ

景氣また形現殊勝候。

か朱點ひがねは山の姿にうづもれて雪のなかばにかかる白雲



「雪のなかば」殊にめづらしく候。山の姿は、建保のころほひ秀歌とて聞え候  
けり。

ながめやる里だに人の跡たえて野中の松に雪はふりつつ  
野中の松に雪もなほ面影あはれに候。

とりかざす日蔭のかづらくりかへし千代とぞ歌ふ神の御前に  
日蔭の鬘、千代の聲、句句其興候。

里わかぬ春の隣となりにけりゆきまの梅の花のゆふかせ  
「里わかぬ春の隣」み残しける風情、めづらしくうつくしく候。

戀十五首

しげ山もふかく入りてぞしをるなる淺茅が露のかからずもがな  
いかにせむおくもかくれぬささがきのあらはに薄き人の心を  
なほ深きおくとかきけど逢ふことの忍ぶにかざる戀の道かな  
ひるはくる遠山鳥のちぎりだに長きおもひにみだれてぞぬる

四首皆妖艶美麗候。

偽黒點のなき世なりともいかにせむちぎりてとはむ夕暮の空

此夕猶拔群最上候。

ちぎらずな人を見る目のよそながら心のうらに袖ぬらせとは

みるめのよそながら、心の浦にぬる袖、又殊勝候。

尋ねてもみぬ目の浦にやくしほのけぶりはそれと人も頼まじ

みぬめの浦のけぶり又同前候。毎度のことばかへる無念に候歟。

鳥朱點の音のあかつきよりもつらかりきおとせぬひとの夕暮の空

晨鷄再鳴、征馬頻嘶て、いきてわかれし曉の怨よりも、道行く人の跡たえて、

あまと雁も音せぬ雲のはたてのつれなき、猶色まさり候らむ。

あふとみてさむる夢路のなごりだになほ惜まるる曉のそら

よ黒點よ黒點ひ黒點よ黒點ひ黒點に袖まきほさむ人もがなとひくる月は涙そふなり

夢路黒點には通ひてしぼる袖にだにひとの涙のぬらしやはする



消えやらぬならばし物の心みよ玉のをばかり幾代へぬらむ

雲井にも誰が關守のまもるらむ通ふこころの中へのだては

五首一一に妖艶、いづれと申しがたく候。

月もなほみしおもかげは變りつつなきふるしてし袖の涙に

不似昭陽花裏看、夜かほる光もふるきためしに候へど、なきふるしてし袖

の涙なほ古今向後無比類候。

暮をだに猶すみわびし有明のふかきわかれになりけるかな

「ふかき別になりけるかな」又銘肝入骨、甚深無雙候。

雜十五首

みよし野の瀧の白あわ落ちたぎりふけども風のことゑは聞えず

瀧の白泡の響に、山風の聲もけたれたるよし、山中の景氣又殊勝候。

夕づく日山のあなたになるままに雲のはたてぞ色かはり行く

夕陽入山曉雲變色のよし、又如眼見候。

くれすとも麓の里にやどからむよるやは行かむ山のかげ道

すずわくるしのおりばへ旅衣ほす日もしらす山のした露

宿をかる夕、岨におもむくあした、とりどりに染心肝候。

なれにけるあしやのあまも哀なりひと夜にだにもぬる袂を

とまやかた枕流れぬうきねにも夢やはみゆるあらし濱風

あしやの一夜、濱風のとまや、數ごとにいづれと申しがたく候。

いつて舟おひ風早くなりぬらしみほのうらわによする白浪

みほのうらわの五手舟、追風の早さも及ぶべきものなく候。

しほきつむあまの小舟ぞ急ぐなる心とたゆむ宿のけぶりに

又下旬珍重殊勝候。

みるめほす濱の真砂の白妙に日影もなびくをみのうら風

白妙の濱にみるめをほして、山藍にされるをみの浦風、詞の色もならびな

く候。



黒點朱點 かつらぎの神や心にわたすらむあけてとだゆる夢の浮橋

又下句殊勝銘肝候。

黒點朱點 秋風のうらふきかへすさよ衣見はてぬ夢はみるかひもなし

定文が葛の葉、さよ衣にてこそ色まさり候へ。

黒點 かげろふは命かけたる夕露に玉の緒ながきくものいとすぢ

朱點 聞くたびに哀とばかりいひすてて幾世の人の夢をみるらむ

陸士衡四十之歎、逋密友不半在、老桑門八旬懷舊、故人悉凋落、心中彌難忍候。

黒點朱點 くるるまもたのむ物とはなけれどもしらぬぞ人の命なりける

至愚意惘然之思、始覺悟候。

いく千代の影とか神もちぎりけむふるのやしろの杉の下風

圖書寮本奥書

嘉禎三丁酉歲應鐘月以盲目染老筆畢

沙彌明靜

以武者小路前大納言本高松三位染筆之

元文三年

皇統  
文庫



# 順徳院御集拾遺

題しらす 玉葉集

山賤の園のかきほの梅の花春しれとしも植ゑすやありけむ

百番御歌合の中に 妙夫木

ちりかかる花にぞくもる大原や月もおぼろの清水なれども  
待てしばしひのくま河の春の風ちらぬ櫻のかげをだに見む

題しらす 道徳集拾遺

櫻花咲くに見しまにたかさごの松をのこしてかかる白雲

百首の御歌の中に 妙夫木

小山田の畔の細道くる人におどろきてたつはるのかりがね

螢 風雅集



池水は風もおとせではちす葉の上こす玉はほたるなりけり

納涼のころを道續拾

夏ふかき板井の水のいはまくら秋風ならぬあかつきぞなき

題しらす載續千

朝な朝なみつの上野に刈る草のきのふのあとはかつ繁りつつ

六月祓を風雅

みたと河なつのゆくては知らねども流れて早き瀬瀬のゆふしで

百首の御歌の中に今續古

かぎりあればきのふにまさる露もなし軒のしのぶの秋のはつ風

題しらす撰續後

草の葉におきそめしより白露の袖のほかなるゆふぐれぞなき

建保二年内裏歌合のついでに夫木抄

いはしろの野中にたてる村薄まつ吹く風にむすぼほれつつ

百首の御歌の中に同

狩人の入野の浅茅ふみしだき鳴くやうづらの床ものこらす

秋の御歌の中に歌百番

夕ぎりのまがきの秋の花すすきをちかたならぬ袖かとぞ見る

同撰續後拾

もみぢする嶺のかけはし見わたせばくれなるくる秋の山人

同歌百番

宮城野のしがらむ萩も散りぬらむあらはれてなく小男鹿の聲

秋の歌あまたよませ給ひけるに風雅

鹿の音をいりあひの鐘に吹きまかせておのれこゑなき峯の松風

題しらす歌玉

秋もはやしぐるるころの色見草ちらまくをしき山風ぞ吹く

小倉山しぐるるころは鳴く鹿のつまこひ草の色ものこらす



たつた山松をたてなるにしき草しぐれてまはる山の横雲

冬の御歌の中に集風雅

千鳥鳴くさほの山風こゑさえて河霧しろく明けぬこの夜は

同歌百番

神無月あらしにまじる村雨に色こきたれてちる木の葉かな  
みちのくの野田の玉川見わたせばしほ風かけてこほる月かげ

題しらす抄夫木

くれかかゝる新島守は霜の袖こほりなはてそわすれがたみに

同探新後

濱千鳥かよふばかりの跡はあれどみぬめの浦に音をのみぞ鳴く

同遺續後拾

あすもまたおなじゆふべの空や見むうきにたへたる心ながさは

同集風雅

おもひあまり知られむと思ふ言の葉もなほ人づての中ぞ悲しき  
忘れむと思ふはおのが心にて誰がおどろかすなみだなるらむ

戀の御歌の中に歌百番

ひとすぢにうきになしても頼まれずかはるにやすき人の心は  
よる浪もおよばぬ浦の玉松のねにあらはれぬ色ぞつれなき

百首の御歌の中に今續古

かくばかりもの思ふ秋のいくとせになほ残りけるわが涙かな

同抄夫木

ちぎりても年の緒長き玉椿かげには千代の數ぞこもれる

題しらす探新後

秋の日の山の端とほくなるままに麓の松のかげぞすくなき

同集風雅

入日さす峯のうき雲たなびきて遙にかへる鳥のひとこゑ



ますらをが山かたつきて住む庵のそとに渡す杉の九橋

後鳥羽院かくれさせ給ひてのち御惱のほどの

御文を御覽じて

新集拾遺

君もげにこれぞかぎりの形見とは知らでや千代のあとをとめけむ

おなじ御なげきの頃月を御覽じてよませたま

うける同

おなじ世のわかれはなほぞ忍ばるる空ゆく月のよその形見に

承久三年七月佐渡國へ遷幸ありけるをり九條

殿へおくらせたまへる御書のおくに

承久記

ながらへてたとへば末にかへるともうきはこの世の都なりけり

佐渡國におはしましける頃ふるくつかうまつ

りける女房の許より十月一日御衣がへの御衣

をたてまつりたりける御返事に

御書

思ひいづる衣は悲しわれも人も見しにはあらずたどらるる世に

またおなじころ御手ならひのついでに同

消えかぬる命ぞつらきおなじ世にあるもたのみはかけぬ契を



### 後堀河天皇御製

うへのをのことも年の内に立つ春といへる心  
を仕うまつりけるついでに新勅撰集

あら玉の年もかはらで立つ春は霞ばかりぞ空にしりける

うへのをのことも海邊月といへる心を仕うま

つりけるついでに同

わか菊の浦葦邊のたづのなく聲に夜わたる月のかげぞさびしき

菊

むしろ田のいつぬきかけし玉ならむ千年をちぎる菊の白露

名所月貞永元年八月十五夜歌合

三笠山ふりさけみれば榊葉のいや年のはに月はすむらし

後堀河天皇御製



數みゆる雁のはだれの霜のうへに月さえわたる天の橋立  
須磨の浦やあまとぶ雲のあとばれて浪より出づる秋の夜の月

うへのをのことも未見戀といへる心を仕うま

つりけるついでに新集

山のはを分けいづる月のはつかにも見てこそ人は人を戀ふなれ

うへのをのことも忍久戀といへる心をつかう

まつりけるついでに同

よそにのみ思ひふりにし年月の空しき數ぞつもるかひなき

をのことも述懐の歌仕うまつりけるついでに同

くりかへし賤のをだまき幾度もとほき昔を戀ひぬ日ぞなき

### 後嵯峨天皇御製

文永二年七月七日白河殿にて題を探りて七百  
首の歌人人によませ侍りしに年中立春といふ

ことを今集古

初音とは思はざらなむひと年にふたたびきたる春のうぐひす

都初春白河殿  
七百首

もろ人の袖をつらねてたちまふに春きたりともみゆる宿かな

位におましましたしける時うへのをのことも題を

探りて歌つかうまつりけるついでに霞を後集

敷島ややまと島根のあさがすみもろこしまでも春はたつらし

子日のところを同



いざ今日は小松が原に子の日して千代のためしにわれもひかれむ

白河殿の七百首の歌に子日松新集後

子の日とて今日ひきそむる小松原木高きまでを見るよしもがな

子日のころを今續古

子の日せし千代の古道跡とめて昔をこふる松もひかなむ

寶治二年歌合に早春霞を同

いづくより春はきぬらむ天の戸のあくるを待たず立つ霞かな

海霞白河殿

ひさかたのあまの汐くむ袖なれや霞にかかるおきつ白浪

五十首の歌の中に江上霞今續古

見ずばまたくやしからまし水の江の浦島かすむ春のあけぼの

建長二年詩歌合に江上春望といふ心をよませ

給うける玉葉

難波渦入江にたてるみをつくし霞むぞ春のしるしなりける

澤若菜白河殿

うらやまし年はつめども澤におふる草をば人の若菜とぞいふ

建長六年三月歌合に鶯を今續古

大方の春のけしきにさそはれてしるべも待たぬ鶯のこゑ

弘長三年二月龜山の仙洞に行幸ありけるに御

還の日の御贈物に御本を鶯のゐたる梅の枝に

つけて奉りしに書きつけ侍りし

梅が枝に代代のむかしの春かけてかはらすきゐる鶯のこゑ

建長元年二月前太政大臣の家に行幸ありてし

ばし内裏になりにける頃梅の花さかりに咲け

るよしきこしめして人して結びつけさせ給う

ける續後

後嵯峨天皇御製



色も香も重ねて匂へ梅の花ここのへになる宿のしるしに

梅浮澗水 七百首殿

谷川のその水上に梅の花ありとやここにながれきぬらむ

建長六年三首の歌合に梅 建長拾遺集

袖ふれば色までうつれくれなるの初花染にさけるうめが枝

夕堇菜といふ事を 今續古

浅茅生の小野の芝生のゆふ露に堇つむとてぬるる袖かな

十首の歌合に山花 後集

見てもなほおくぞゆかしき蘆垣の吉野の山の花のさかりは

文永二年白河殿にて人人題を探りて七百首の

歌仕うまつりけるついでに野花といふ事をよ

ませ給うける 新續古

雪とのみふるから小野の櫻花なほ木のもととは忘れざりけり

龜山の仙洞に吉野山の櫻をあまた移し植ゑ侍

りしが花の咲けるを見て 今續古

春毎に思ひやられし吉野の花は今日こそ宿に咲きけれ

弘長二年十首の歌講じ侍りしに静見花といふ

事を 同

目かれせぬ宿の櫻の花盛わがこころさへ散るかたぞなき

文永元年春鷺尾の花しのびて見侍りし時 同

なつかしき香にこそ匂へ袖ふれし代代の昔の花のした風

題しらす 續拾遺集

吹く風のさそふ匂をしるべにて行くへ定めぬ花の頃かな

遠花 夫木抄

夢にだにまだ見ぬものをもちしの吉野の櫻いかが咲くらむ

花下忘歸 七百首殿

後嵯峨天皇御製



みる人の家ぢわするる花盛などしもかへる春のかりがね

文治二年七月白河殿にて人人題を探りて七百

首の歌仕うまつりけるついでに花下忘歸とい

ふことを新後撰集

皆人の家路わするる花盛なぞしもかへる春のかりがね

正元元年三月大宮院西園寺にて一切經供養せ

られし日行幸侍りしに東宮同じく行啓ありて

次の日人人翫花歌よみ侍りしに今續古

いろいろに枝を連ねて咲きにけり花も我が世もいまさかりかも

霞中花白河殿七首

立ちかくす花をばしらす大方のかすみぞ匂ふ春のあけぼの

文保二年白河殿にて人人題を探りて七百首の

歌仕うまつりけるついでに曉花新集拾遺

これもまた有明のかげと見ゆるかな吉野の山奥の花のしら雪

西園寺に御幸ありて翫花といふ題を講せられ

けるに風雅集

萬代の春日を今日になせりとも猶あかなくに花やちるらむ

建長六年三首歌合新千載集に

吹く風の恨は身にぞかへりぬる治れる世は花もちらじを

文永二年七月白河殿にて人人題をさぐりて七

百首の歌仕うまつりけるついでに浦春月續拾遺集

處がら光かはらば春の月あかしの浦はかすまずもがな

殘花のころを今續古集

たづねばや青葉の山の遅ざくら花の残るは春のとまるか

松下躑躅白河殿七首

さきまじる山のつつじの春の色をいはねの松にかけて見るかな

後嵯峨天皇御製



夕歎冬七百首

暮れぬとも遠方人にこととはむいはぬ色なる花はなにぞも  
文永二年白河殿にて人人題を探りて七百首の  
歌仕うまつりけるついでに浦藤をよませ給う

ける新編古

心あるあまや植ゑけむ春ごとに藤さきかかる松が浦島

建長二年江上春望といへる題にて詩歌を合は

せられ侍りしついでに後集

紫のふち江の岸の松が枝によせてかへらぬ浪ぞかかれる

春欲暮七百首

たえて見るわれをつれなく思ふらむ春くれがたの有明の月

暮春のころを新編

暮れて行く春の手向やこれならむ今日こそ花はぬさと散りけれ

廬橋初開七百首

昔べの匂ときけどたのまれず今朝開けたる軒のたちばな

閑中五月雨同

曇る日の五月雨しげき此のごろはわが影だにもみえぬ宿かな

泊五月雨といふことを夫木抄

今日もなほ泊りやせまし唐琴のひかすながびく五月雨の頃

十首の歌合に五月郭公といへる心をよませ給

ひける後集

里なれて今ぞなくなる時鳥五月を人は待つべかりけり

聞郭公といふことを雲葉集

一聲のなごりぞとまる時鳥これやせきやのしるしなるらむ

五十首の御歌の中に新編後拾遺集

これぞげに初音なるらむ聞く人も待ちあへぬまの時鳥かな



文永二年七月白河殿の七百首に鳥夏草抄夫木

駒なべて野島をすぐる狩人のゆずるもみえずしげる夏草

鵜河をよませ給うける遺集拾

夕闇にあさせしら波たどりつつみをさかのぼる鵜飼船かな

深夜鵜河と云へるころを新集古

かたぶけば山陰くらき大堰河月にもくだす鵜舟なりけり

建長三年秋吹田にて人人歌仕うまつりけるに新集後撰

いたづらに野澤に見ゆる螢かな窓にあつむるひとやなからむ

河夏祓七百首殿

河べなるあらぶる神にみそぎして民しづかにと祈る今日かな

初秋のころを詠ませ給うける遺集拾

さらでだに夏をわするる松かげの岩井の水に秋はきにけり

初秋風歌院合

秋といへばあへず色づく木の葉かなけさこそ風の音は身にしめ

初秋露影合供

ぬれてほす野原の草の露のまに千とせの秋のいつかきぬらむ

七夕の心を集風雅

たなばたに心をかして歎かな明方ちかきあまの河風

文永八年七月七日白河殿にて人人題を探りて

歌つかうまつりけるついでに七夕橋新集千載

葛城の神ならねども天の河あくるわびしきかささぎの橋

織女契久七百首殿

七夕のあまの羽衣いはなでてつきぬや今日のためしなるらむ

六帖の題にて歌よみ侍りし時すすきを今集古

絲薄こなたかなたに植ゑおきてあだなる露の玉の緒にせむ

萩驚夢七百首殿

後嵯峨天皇御製



さらでだにねざめがちなる老らくの夢なさましそ萩の上風

題しらす新後撰集

誰が袖に秋まつほどは包みけむ今朝はこぼるる露の白玉

建長三年九月十三夜十首の歌合に山家秋風同

山ふかきすまひからにや身にしむと都の秋の風をとばばや

龜山殿にて山家草花といへる事を同

庵しめて今こそ庭となりにつれ山の尾の上の秋萩の花

秋の御歌の中に夫木抄

葦すだれゆふ暮かけて吹く風に秋のこころぞ動きそめぬる

建長二年八月十五夜三首歌合に同

たが世にか植ゑはじめけむ石の上ふる野に咲ける秋萩の花

建長二年八月鳥羽殿御會の當座二首の御歌に

曉鹿同

有明の空だのめなる妻こふとまつちの山に男鹿なくらむ

文永七年七月白河殿の七百首に遙聞鹿同

嵐山あらしにつけて聞ゆなりならびの岡のさをしかの聲

文永二年九月十三夜の歌合に野鹿を今續古撰集

寝られずや妻を戀ふらむしめ野ゆき紫野ゆき鹿ぞなくなる

月前鹿夫木抄

月みても慰めかねてなく鹿のこゑすみのぼるをばすての山

嶺鹿白河殿七百首

夕ぐれは小倉の山の峯つづき鹿もあはれにたへぬ聲かな

建長二年鳥羽殿にて野外鹿といふことを詠ま

せ給うける新後撰集

秋の野の尾花が本になく鹿も今は穂に出でて妻をこふらし

建長三年九月十三夜十首の歌合に暮山鹿新後撰集



暮れ行けばは山しげ山さはり多み逢はでや鹿の妻をこふらむ

題しらす新集後撰

他にまた野はなければや小男鹿のここにしも鳴く聲のきこゆる

曉鹿といふ事ををのことも仕うまつりけるつ

いでに續後撰

秋の夜のながき思やかよふらむ同じ寢覺のさを鹿のこゑ

池上月白河殿七百首

大空の雲こそあらめ月すめば池をも風のはらふよはかな

獨對月同

枕にもあとにも人のなきねやにおきゐて見つる秋のよの月

寶治元年八月十五夜名所の月を夫木抄

見る人もやどかる月も諸共にちとせすむべき常磐井の水

關月といへるこころを新集後撰

曇なく月もれとてや河口の關のあらがき間遠なるらむ

題しらす新拾遺集

神代より幾よろづよになりぬらむ思へば久し秋のよの月

建長二年八月十五夜鳥羽院にて池上月といへ

る事を講せられけるついでに同

蓮葉の玉かとぞ見る池水のにごりにしまぬ秋のよの月

文永二年八月十五夜の歌合に未出月今續古

大空の雲ものこらす吹きなして風も月待つけしきなるかな

田家月影合供

月夜よし夜よしとぞみるわが門のわさ田おしなみ穂にいづる頃

初昇月十五夜歌合

雲のみか山のは近き夕暮は月もよこぎるひかりなりけり

停午月同

後嵯峨天皇御製



久方の空にや月もやすらはむ秋のなかばに心とどめて

漸傾月 十五夜歌合

月は今のきばの松のかげにこそかたぶきそむる程はみえけれ

河月 龜山歌合五首

大空の月はひとつを飛鳥川ななせのよどにいかですむらむ

鳥羽にて里月 今集古

里の名も久しくなりぬ山城のとはに逢ひ見む秋のよの月

五十首の歌の中に見月 同

幾めぐり馴れぬる秋を思ふにも老いてぞ月にあはれそひける

欲入月 同

有明の空にぞ似たる山の端に入りかかりぬる月の面かげ

建長二年八月十五夜鳥羽殿の歌合に月前風を 遺集拾

いにしへの風もかはらぬわが宿はすみなれてこそ月も見らるらめ

十首の歌合に海邊月といへる心をよませ給ひ

ける 探集後

鹽竈の浦の煙はたえにけり月見むとての蟹のしわざか

九月十三夜十首の歌合に昔の長柄の橋の橋柱

にて作りたる文臺にて講せられて侍りし時名

所月 同

月もなほながらに朽ちし橋柱ありとやここにすみ渡るらむ

九月十三夜十首の歌合に朝草花 同

わすれずよ朝ぎよめする殿守の袖にうつりし秋萩の花

秋依月勝といへるころを 遺集拾

わきてこの心盡しは秋ぞとも木の間の月の影よりぞしる

駒迎を 同

年をへて雲の上にてみし秋のかげも戀しき望月のこま



建長二年九月山中秋興といふ題にて詩歌を合

せられしついでに標集後

いにしへの跡をたづねて小倉山みねの紅葉やゆきてをらまし

擣衣到曉白河殿  
七百首

夕月夜つきみがてらはいかがせむあかつきやみにうつ衣かな

山家擣衣を續古  
今集

山彦のこたふる宿のさ夜衣わがうつ音やよそにきくらむ

文永二年八月をのことも詩を作りて歌に合は

せ侍りしに水郷秋望といふことを同

誰れをかも心もうきて河霧のそらにまつらむ宇治の橋姫

白河殿の七百首の歌に水邊菊續古  
遺集

汲みてこそ千年もかねて知られられぬれてほすてふ菊の下水

山路菊白河殿  
七百首

きえぬまや千年なるらむ朝ごとに山路の菊における白つゆ

松間紅葉同

深緑ひとつ梢とみし松のけぢめことなる紅葉なりけり

紅葉映水同

木の本をかけはなれたる山のるにうつるも浅き薄紅葉かな

もみぢ現存和  
歌六帖

はるばると一つ梢とみし里もけさは色色のもみぢしにけり

紅葉の歌とてよませ給うける新千  
載集

さらでだに紅葉にあける神南備の三室の山はなほしぐるなり

紅葉盛といへるころを續古  
遺集

枝かはすよその紅葉に埋れて秋は稀なる山のとときは木

文永二年九月十三夜の歌合に山紅葉を續古  
今集

外よりは時雨もいかが染めざらむわが植ゑて見る山のもみぢば

後醍醐天皇御製



文永五年九月十三夜白河殿の五首の歌合に暮

山紅葉

撰集後

かねてより袖もしぐれて墨染のゆふべ色ます山のみぢ葉

行路紅葉

歌影供

散らぬより紅葉や道をうづむらむみてすぎ行かむ方も忘れて

霧間雁

同

何故にいざなはれつつ雁がねのゆきては歸るならひなるらむ

久方のあまぎる霧のたえだえにそれかと見えて雁はきにけり

暮山雁

撰集後

玉章はよみもとかれじ墨染の夕べの山をこゆる雁がね

初冬のころを

撰集後

かきくらし雲のはたでぞしぐれ行く天つ空より冬や來ぬらむ

杜時雨

白河殿  
七百首

津の國のいくたの森の夕時雨そではぬるやと人のとへかし

山時雨といふことをよませ給うける

撰集後

吹きすぐる檜原の山の木枯にききもわかれぬ村しぐれかな

九月の頃眞親龜山の仙洞にまゐりて侍りし又

の日つかはし侍りし

撰集後

昨日けふ散りこそ増れみし人の心もとめぬ宿のもみぢ葉

弘長二年嵯峨にて十首の歌講せられけるついでに

河落葉を

撰集後

我が宿の物なりながら大堰河せきも止めず行く木の葉かな

橋上落葉

撰集後

山人は心あてにや渡るらむ木の葉がくれの谷のかけはし

建長二年吹田に御幸ありて人人に十首の歌よ

ませさせ給ひけるついでに

撰集後

後嵯峨天皇御製



もろこしもおなじ空こそしぐるらめから紅にもみぢするころ

弘長二年龜山の仙洞にて人人十五首の歌よみ

侍りしに朝寒蘆を今續古

あさ嵐山のかげなる河の瀬に波よるあしの音のさむけさ

原 雪七白河殿

行く駒のあしにまかせてみつるかな知らぬ野原のけさの初雪

寶治元年十首の歌合に野外の雪新拾遺集

いとどまた限も見えず武藏野や天ざる雪のあけぼのの空

磯 雪七白河殿

波よする磯の洲崎の一つ松こするばかりにつもる白ゆき

禁庭雪と云ふ事をよませ給うける新千載集

白雪のいやかたまれる庭の面をたぐはらひかねたる伴のみやつこ

雪をよませ給うける玉葉集

行く水にうかぶ木の葉のひまをなみ氷らぬ上もつもる白雪

白河殿の七百首の歌に濱邊雪續拾遺集

八百日ゆく濱の真砂地はるばるとかぎりもみえずつもる白雪

三首の歌講じ侍りしついでに河水を今續古

あすか河ゆくせの水の薄氷こころありてやよどみそむらむ

百首よませ給うけるに續拾遺集

少女子が袖しろたへに霜ぞおく豊のあかりも夜やふけぬらむ

寛元二年十一月東三條神樂の夜岡屋入道前攝

政太政大臣に遣はし侍りし今續古

白雪の降りにし跡にかはらねば今宵や神もこころとくらむ

人人に十首の歌めされしついでに續後撰集

忍ぶるぞかなはざりけるつらきをもうきをも知るは涙なれども

九月十三夜十首の歌合に寄月恨戀同



このぬ人によそへて待ちし夕より月てふものは恨みそめてき

影供歌合に寄煙忍戀今集古

忍ぶともうはの空にや知られまし戀に煙の立つ世なりせば

弘長二年十首の歌講じ侍りしに忍待戀を同

我れさへに又偽になりにけり待つといひつる月ぞ傾く

建長二年歌合し侍りしに忍戀同

訪はぬをもたがづらさになし果てむ形見にしのお心くらべに

稀逢戀を同

あふことの稀なるものは秋を待つ紅葉の橋とわが身なりけり

五十首の歌の中に絶戀を同

心にもまかせばとこそ頼まるれたえだえなれど中川の水

寄月戀道集拾

いとせめて忍ぶる夜はの涙とも思ひも知らでやどる月かな

忍戀のころを同

わが涙露ももらすな枕だにまだしらすげの眞野の秋かせ

戀のころを同

わが涙あふをかざりと思ひしになほいひしらぬ袖の上かな

なかなかに面影さらぬ形見にて今はあだなるよはの月かな

白河殿の七百首の歌寄沼戀同

隠沼におふる菖蒲のわれなれや繁きうきねも知る人ぞなき

文永二年九月十三夜五首の歌合に絶戀同

妹とわれ花田の帯の中なれや色かはりぬいかはるかと思れば絶えぬる

寄海戀といふことを詠ませ給うける同

憂きことは津守の海士の朝夕に恨むとだにもしらせてしがな

題しらす新集後

心のみかざり知られぬみだれにて幾年月をしのぶもちずり

後嵯峨天皇御製



忍ぶるもためしあらしと苦しきを顯ればまたいかげんかむ

寶治元年十首の歌合に忍久戀新後撰集

つれなきも言はねばこそと思はずば年月いかでながらへもせむ

寄月戀を同

かへるさの別のみかはまつ人のつれなきもうき有明の空

白河殿の七百首の歌に寄筵戀同

いつまでかしき忍ぶべきそのままに我が塵はらふ床のさ筵

おなじ折の歌に恨不逢戀といふことを同

年月はあはぬ恨と思ひしに恨みてあはず何時なりにけむ

文永八年七月白河殿にて人人題をさぐりて歌

つかうまつりけるついでに不逢戀新後撰集

涙のみもるや關屋の板びさしあはぬ月日をさて過しつつ

絶戀を同

とにかくに苦のみだれて思へども絶えて年ふる久米の岩橋

建長三年吹田にて十首の歌講せられけるに風雅集

憂きふしは數にもあらずしづた巻くりかへしては猶ぞ戀しき

戀の歌の中に新拾遺集

忘れじの言の葉なくば中中にとはぬ月日を恨みざらまし

人人題を探りて歌仕うまつりけるついでに恨

戀の心を詠ませ給うける新後撰集

小夜衣かへすかひなき思ひ寐の夢にも人を恨みつるかな

建長二年三首の歌召されけるついでに戀の心

をよませ給ひける新撰古今集

なれてこそ心にかかれ玉垂のみずば忘るるひまもあらまし

文永二年七月白河殿の七百首に篠垣夫木抄

年月を中にへだつるしの垣のひとよふたよにあふよしもがな

後嵯峨天皇御製



寄風戀 抄秋風

妹とぬるすきまの風ぞ猶さむきいつならひける心なるらむ

寄岡戀 七百首

たのめおきし跡をたのみて水莖の岡のやかたに人を待つかな

寄菖蒲戀 同

いつまでかあやめもしらぬ菖蒲草けふあらはれてねこそなかるれ

寄千鳥戀 同

よもすがら友なし千鳥なきわびぬ我ればかりやは物思ふらむ

寄鏡戀 同

形見とてみるもはかなしますます鏡とまらざりける人の面影

逢不遇戀 歌院御合

あかしかねまたるる物となりにけりさしも厭ひし鳥の八聲を

不逢戀 龜山殿五首御歌合

いたづらにめぐりもあはず戀草のななぐるままで年はつめども

山家風 七百首

風だにも一方よりぞかよひける山たちめぐる麓なるいほ

山家梯 同

かつらぎの神にやこれもかこたまし人目もたゆる岩のかけ橋

山家垣 同

心にはうき世へだつと思へども猶ことしげし庭のささ垣

こけ 歌現存帖

奥山の谷には冬もよそなれや霜がれもせぬ昔のいろかな

三百首の御歌に 抄夫木

荒熊のなれて住むなるしはせ山やまもいかにかはげしかるらむ

旅宿嵐 歌院御合

松がねの枕さだめむ事ぞなきいかにはげしき夜はの嵐ぞ



鞆中雨 七百首殿

村雨の過ぐるをまたでいそぐかなとまるも遠き道と思へば

五十首の御歌の中に鞆中衣といふことをよま

せ給うける 新拾遺集

分けすぐる千種の花のすり衣おもひ亂るる旅のそらかな

文永八年七月七日白河殿にて人人題をさぐり

て歌仕うまつりけるついでに旅泊の心をよま

せ給うける 新千載集

風荒きむしあけの瀬戸の夕闇に友よびかはす夜はの舟人

題しらす 新拾遺集

龜山の峯たちこえて見わたせば清瀧川をおとす筏師

同 抄夫木

龜の尾の山の岩根の松が枝にむれゐるたづはこころあるらし

題をさぐりて七百首の歌人人によませ侍りし

ついでに鞆中船を 今集古

袖の香やなほとまるらむ橘の小島によせし夜はの浮舟

熊野河の舟にて 同

熊野河せざりに渡す杉舟のへなみに袖のぬれにけるかな

前のおほきおほいまうちぎみの吹田の家に御

幸ありし時人人に十首の歌めされしついでに

旅 後集

河舟のさしていづくかわがならぬ旅とはいはじ宿と定めむ

三百首の歌の中にしきを 今集古

小車のにしき手向くる神路山まためぐりあふ年はきにけり

名所津 七百首殿

今も猶冬ごもりする難波津に昔おぼゆる梅のかぞする

後嵯峨天皇御製



名所崎白河殿  
七百首

唐崎のまつものいはばこととはむ志賀の都の昔いかにと

白河殿の七百首の歌に名所瀧といへる事をよ

ませ給ひける遺集拾

今もまた行きても見ばや石の上ふるの瀧つ瀬あとを尋ねて

山狩獵白河殿  
七百首

狩人のやのの神山身にかへて妻かくしぬと鹿ぞなくなる

文永五年九月十三夜白河殿の五首の歌合に河

水澄月新集後  
撰集後

われのみや影もかはらむ飛鳥河ふちせも同じ月はすめども

熊野に詣で侍りしついでに住吉にて浦の松を今集古

みつ汐も岸べはるかになりはてて今はうらなる住吉の松

龜山の仙洞にて詠み侍りし歌の中に同

我が宿の物かあらぬか嵐山あるにまかせて落つる瀧つ瀬

六帖の題の歌の中に國を同

久方の天よりおろす玉ぼこの道ある國ぞ今のわがくに

三百首の歌の中に島を同

有明の空に別れしいもが島かたみの浦に月ぞのこれる

建長六年正月柿本の影供し侍りしに眞影を渡

し遣はすとて包紙に書きつけ侍りし同

今日をいかにみそなはすらむ昔より身を離れたる影しなれば

述懐の歌に同

ささ竹のわがよの程の思出にしのはれぬべきひとふしもがな

寄枕述懐夫木抄

我が肱を枕にしつつ思ふかなげに樂はこれにすぎじと

文永二年七月白河殿の七百首に同



末の世と思ふもわびしひさししより竹はきりてぞ笛のねをもたてける

三百首の歌の中に今續古

ぬるが中に思の外の事も見つ夢よいかなる物としらばや

前内大臣此の集書きて奉るとて包紙に「此の度

と波よせつくす玉津島みがくみことを神はう

くらし」と書きつけたりける御返し同

和歌の浦に波よせかくる藻しほ草かきあつめてぞ玉も見えける

題しらす近續拾

いつとなく今はならひの寐覺とは老いてしらるる曉の空

三百首の歌の中に今續古

黒髪はすぢかはれども小紫わが元結のいろぞつれなき

前左大臣神無月の頃山しなの山莊にありける

に時雨しける日女房のもとに「時雨のみおとは

の里は近けれど都の人のことづてもなし」と申  
しおくりし御返し同

とはすとも音羽の里の初時雨こころの色は紅葉にも見よ

寶治二年前のおほきおほいまうちぎみの西園

寺の家に御幸ありてかへらせ給ふ御おくり物

に代代のみかどの御本たてまつるとておとど

包紙に「つたへきくひじりの御代のあとを見て

ふるきをうつす道ならはなむ」と書きつけける

御返し後續集

知らざりし昔に今や歸りなむかしこき世世の跡ならひなば

鳥羽殿にはじめて渡らせ給うて池邊松といふ

事を講せられし時同

影うつす松にも千世の色見えてけふすみそむる宿の池水



題しらす遺集拾

おく露は色もかはらぬ夕かなわが身ひとつのすみ染の袖  
櫛とりますみの鏡かけしより神の國なるわがくにぞかし

題しらす新撰後集

心とや行くも歸るもなげくらむ人やりならぬひなの別路  
道あれとなにはの事も思へども蘆わけ小舟末ぞとほらぬ

後深草院位の御時花の盛に上達部殿上人鞠つ

かうまつりけるを御覽せられけるよしきこし

めして松の枝に鞠つけて奉らせ給ふとて結び

つけさせ給うける玉葉集

吹く風も治りにける君が代の千年の數はけふぞかぞふる

題しらす同

ささ蟹のくものふるまひ哀なりこれも心のすぢは見えつつ

文永八年七月七日白河殿にて人人題をさぐり

て歌つかうまつりけるついでに遺集後拾

墨染の袖にもなほやうつさまし古枝にさける萩が花すり  
なかなかに人より物を歎かな世を思ふ身の心づくしは

題しらす同

夢のうちにさめむと思ふ心よりまだ見ぬさきぞ現なりける

建長五年住の江に御幸侍りて行旅述懐といふ

事を講せられ侍りけるによませ給ひける千載集

跡たれし神代に植ゑば住吉の松も千年をすぎにけらしも

文永六年白河殿七百首に披書知昔夫木抄

昔人やいかなる繩をむすびおきて今もその世の事を知るらむ

社頭雞七百首殿

昔たれ曉ふかくみそぎしてゆふつけ鳥の名をのこすらむ

後嵯峨天皇御製



祝部成茂七十の賀し侍る由きこえければ思し

めしやりて詠ませ給うける新千載集

七十の今日のためとや昔より社のかずを定めおきけむ

三首の御歌の中に竹を玉垂集

此の君の御世かしこしと吳竹のすゑすゑまでもいかでいはれむ

文永三年三月續古今集の竟宴行はせ給ふとて

よませ給うける同

三世までにいにしへ今の名もふりぬ光をみがけ玉津島姫

寶治の百首の歌めしけるついでに寄社祝新撰集

石清水きよき心にすむときく神のちかひは猶もたのもし

吹田にて十首の歌めされしついでに祝撰集後

きてみれば千代もへぬべし高濱の松にむれるる鶴の毛衣

十首の歌合に社頭祝同

我が末の絶えずすまなむ五十鈴河そこに深めて清き心を

八幡にこもり侍りし時今撰古

石清水木がくれたりし古を思ひいづれば澄むころかな

住吉の社の遷宮の後熊野に詣でて侍りしついでに彼の社によみて奉りしうた同

神よ神なほすみよしと見そなはせ我が世にたつる宮柱なり

題しらす撰集後

男山老いてさか行く契あらばつくべき杖も神ぞきるらむ

日吉の社に御幸の時よませ給ひける同

道あれと我が世を神に契るとて今日ふみそむる志賀の山越

神祇の歌とてよませ給うける撰集後

明けき日吉の影をたのみつつのどけかるべき雲のうへかな

題しらす撰集後

後嵯峨天皇御製



八雲たつ出雲八重垣かきつけて昔がたりを見るぞかしこき

新嘗祭 七百首

契あれや神のすごもを打ちはへて新嘗まつる昔おもへば

仁王會 同

千千の人命のべけむためしよりももぎのうへにとける御法ぞ

豊明をよそに聞しめしける年くらの賜はすと

て新集千載

雲の上をこふる涙のくれなるに染めつる色を君にくらべむ

月夜極樂を觀せさせ給ふとて新集

雲間よりいざよふ月にあくがれていとど西にも行く心かな

寶塔品 遺集拾

古も今もかはらぬ月かげを雲の上にてながめてしがな

授記品 新集後撰

更け行けば出づべき月と聞くからにかねて心の闇ぞはれぬる

不輕品 拾遺風體集

あはれなりうきもつらきも聞きながらたへ忍びける人の心は

下輩觀をよませ給ひける新集後撰

愚なる涙の露のいかでなほ消えてはちすの玉となるらむ

者園會 同

言ひ置きし我が言の葉のかはらぬに人の誠は顯れにけり

華嚴經の心をよませ給ひける遺集拾

谷の戸はまだあけやらす思ふらむ高き峯には日影さすなり

觀無量壽經 水想觀 同

水の面にうつりうつらぬ影にこそ澄みにごりける心をばしれ

月の夜座禪のついでに今集古

何とかは月やあらぬと迫るべき我がもとの身を思ひしりなば

後嵯峨天皇御製



非有非空の心を今續古

大空を空しとみれば絲遊の有るにもあらず無きにしもなし

法華經序品 以是知今佛欲說法華經同

法の花いまでも古枝にさきぬとはもとみし人や思ひいづらむ

龜山の仙洞の持佛堂の供養に法印聖憲を導師

にめして女郎花の枝に菩提子の念珠をかけて

布施に賜はすとてつけ侍りし同

名にめでし嵯峨野の秋の女郎花はなも菩提の種としらすや

白河殿の七百首の歌に維摩會をよませ給うけ

今續古

神無月時雨ふりおける御法とて奈良の都にのこることの葉

三心具足の三佛を同

言葉には三つと説けども一すぢにまことをいたす心なりけり

題しらす同

荒れにけり籬の苔の深みどり誰がぬぎかけし衣なるらむ

思順上人扇を忘れて罷り出でにける後に給は

せける續集千

たとへこし扇もさこそわするらめ月をも月とわかぬ心に

浄金剛院にてよませ給うける玉葉

幾里かあらしにつけて聞ゆらむわがすむ寺の入相の鐘

三百首の歌の中に都鳥を今續古

都鳥なにごと問はむおもふ人ありやなしやは心こそしれ

右大將通雅の母身まかりし思にて入道前右大

臣栗田口の山莊にこもり居て侍りし春の花の

頃つかはし侍りし同

雨となり雲となりにし形見にもまがふ櫻の色や見るらむ

後嵯峨天皇御製



後嵯峨 寶治御百首

春二十首

歳内立春

一年をわきぞかねぬるみ冬づき残る日数の春はきにけり

山霞

今はまた霞へだてて思ふかなおほうち山の春のあけぼの

春雪

春のたつあところ見ゆれ朝日影さすや岡べきゆるにとくる白雪

朝鶯

鶯のさへづる今朝の初音よりあらたまりける春ぞしらるる



澤若菜

年をへて澤邊の草はおいにけりなとて若菜といひはじめけむ

餘寒

あしびきの山の嵐ぞなほ寒きうべきさらぎと人もいふなり

梅薫風

ことならば色をもみせよ梅の花香はかくれなきよはの春風

行路柳

たまほこの道ならなくにはるばるとよりてぞみつる青柳の絲

春雨

長しとはなにこそ立てれ春雨のふりつるなべに今日もくれつつ

若草

あかねさす紫野にもなのみしておなじ緑の春のわかぐさ

春月

いつはとは影はわかねどよはの月かすめば春の物にぞありける

歸雁

何故にいざなはれつつ雁がねのゆきてはかへる習なるらむ

初花

いとはやも宿の櫻は咲きにけり花待つ人のここにしもくる

見花

年をへて色もかはらずみゆるかな何ぞは花をあだものといふ

翫花

いざ櫻われもかはらず年をへて老いせぬ春は折りてかざさむ

惜花

かくばかり惜しと思ふ日をくれぬとて花みで歸る人さへぞうき

落花

散りはててあくたになると山櫻花のところは朝ぎよめすな



松上藤

ふかみどり色もかはらぬ松が枝は藤こそ春のしるしなりけれ

籬歎冬

さきぬともいはぬ色なる山吹のまがきの内をしる人ぞなき

暮春

梓弓はるの日敷もけふばかりいるがごとくぞ過ぎにける哉

夏十首

首夏

あらたまの年をかさねてかへつれど猶ひとへなる夏衣かな

待郭公

身にしらば初音きかせよ郭公五月をまつもくるしかるらむ

聞郭公

われもまたいざかたらはむ郭公まちつる程のこころづくしを

早苗

足引の山田のさなへとりどりに民のしわざはにぎはひにけり

溪五月雨

谷川の渡りしせせもひびくまで音こそまされさみだれの頃

夏草

ふりたつる弓末もみえず夏草の野鳥が道をすぐる狩人

夏月

夏のよもかげぞ涼しき久方の月のいづこ（くま）に秋やどるらむ

水邊螢

山水のたざりて落つる岩かげに玉ちりまがひとぶ螢かな

夕立

かきくらす空ともみえず夕立のすぎ行く雲に入日さしつ



六月祓

大ぬさの引手あまたの里ごとになごしのはらへけふ急ぐなり

秋二十首

早秋

風の音のにはかにかはるくれはどりあやしと思へば秋はきにけり

乞巧奠

七夕にかしつることの同じくばひきもとどめよあかぬ別を

萩風

たのめおく人なきよはも秋風のそよとおどろく庭の萩原

萩露

白露もこぼれて匂ふたかまどの野べの秋はぎいまさかりなり

秋夕

我れながら思ひもわかぬ涙かなたそがれ時のあきのならひは

初雁

ほのぼのと朝霧がくれ初雁のはつかにすぐる聲きこゆなり

秋田

梓弓春はあら田とみえしものをはや穂にいでてなるこ引くなり

夜鹿

きく人の袖も露けしさよ衣妻ごひになくさをしかのこゑ

曉蟲

曉の枕の下にすみなれて寐覺こととふきりぎりすかな

山月

いづくにも月は一つをいかにしてをばすて山はてりまさるらむ

湖月

さざ浪やしがの浦風うみふけばにほてりまさる月のかげかな



野月

いるかたの山のはもなき武藏野のあくともよはの月や残らむ

渡月

さしのぼる月もさやけし天の川遠きわたりと秋やなるらむ

庭月

夜をかさね露の玉しく庭もせに光そへたる秋のつきかけ

關霧

旅人の友まどはしてよばふなり朝霧ふかきあしがらの關

聞擣衣

夜やさむき賤のをだまきくりかへしいやしき聞に衣うつなり

重陽宴

いくめぐり限らぬ年をつむ菊の數さへみゆるけふのさかづき

森紅葉

立田姫もみぢの錦おりかけてたむけしてけり神なびの森

川紅葉

流れつる紅葉ぞとまる大井川ぬせきやもとのふる葉枝なるらむ

九月盡

をしみかね千千にぞ今日はなぐさむる我が身一つの秋の暮かは

冬十首

初冬時雨

冬きては衣ほすてふひまもなくしぐるる空のあまのかこ山

落葉

あしびきの山の木の葉もちりはててあらはに冬のけしきなる哉

寒草

垣根なる草も人めも霜がれぬ秋のとなりやとほざかるらむ

寶治御百首



浅雪

このねぬる朝風さむしうべしこそはだれにつもる夜はの白雪

積雪

嶺におふる木木の梢もうづもれて山よりたかくみゆる雪かな

池氷

朝毎に氷ぞ今はむすびける霜がれはてしきくの池みづ

豊明節會

あまをとめ玉もすそひく雲の上の豊のあかりは面影に見ゆ

冬月

白妙の光ぞまさる冬の夜のかつらにゆきつもるらし

鴻千鳥

このゆふべしほみちくらし難波鴻あしまの千鳥聲さわぐなり

歳暮

これぞこのつもれば老となる年のくるるをしらで何いそぐらむ

戀二十首

寄月戀

かきくもり空ゆく月の影をだにまだみぬ人を戀ひや渡らむ

寄雲戀

はかなしや夢の面影きえはつる朝の雲はかたみなれども

寄雨戀

はれくもり降りつる雨といひなして今日こそやすく袖ぬらしつれ

寄風戀

妹とぬるすきまの風ぞなほ寒きいつならひける心なるらむ

寄煙戀

よしや人みまれみすまれ今はただめづらしげなき戀の煙を



寄關戀

聞くたびになこそその關の名もつらし行きてはかへる身にしられつつ

寄瀧戀

音にきく吉野の瀧もよしや我が袖におちける涙なりけり

寄原戀

このねぬる朝の原の露けきはまじおき別れつるなみだなりけり

寄橋戀

暮ればまたこむと契りて別れにしままの繼橋まちやわたらむ

寄湊戀

おなじくはもろこし舟もよりななむしる人もなき袖の湊に

寄木戀

顯れて後はうくとも名取川あふはうれしきせせのうもれ木

寄草戀

こひわびて身はうき草と思へどもねはたえずこそなほなけれけれ

寄蟲戀

我が戀にたれかまさるとくらべみむよるはすがらにもゆる夏蟲

寄鳥戀

年月ぞ早くすぎゆく飛ぶ鳥のあすかけふかと君をまつまに

寄獸戀

荒熊もなればなれなむしはせ山しばしもあらずつらき君かな

寄玉戀

彥星のかざしの玉のたまたまも逢ふよさだめてあふよしもがな

寄鏡戀

面影のとまりやあると歸るさの朝ごとにみるますかがみ哉

寄枕戀

獨寢のありかすとしてや積りぬる塵もはらはじつげの小枕



寄衣戀

紫のねずりの衣かさねこし君がゆかりの色もなつかし  
寄弓戀  
偽のまゆみつき弓年ふれどおきふし君をまたぬまぞなき

雜二十首

曉 鷄

寢覺する曉やみのうつつにも夢にも鳥のこゑぞきこゆる

夜 燈

長き夜の心のやみのしるべせよ猶のこりける法のもし火

峯 松

み吉野の青根が嶺の名もしるしときはにみゆる松の村立

里 竹

思ひ入るみ山の里のしるしとてうき世へだつる窓のくれ竹

磯 巖

たちかへり浪はひけども梓弓いその岩根はつれなかりけり

嶋 鶴

をぐる崎みつの小嶋にあさりするたづぞ鳴くなる浪たつらしも

岡 篠

篠の葉のさやく霜夜は水ぐきの岡のやかたにふしぞわづらふ

江 葦

霜枯の入江になびくながれ葦のしづむ下葉は色もかはらず

浦 船

朝日さすかたの浦風しづかにてけふはいでそふあまのつりぶね

柚 山

斧の柄もくちきの柚の山人はよをつくしてや宮木ひくらし



岸 苔

住吉とおもはむ<sup>たゞ</sup>人のためなれや岸にしくてふ苔のさむしろ

山家水

わが心すみもやすると庵しめてみればにされる山の井のみづ

山家嵐

たえず吹くみ山嵐はかはらねとただ宿からぞさびしかりける

田家雨

小山田のいなばのこらすかり庵にいたづらにもる夜の雨哉

旅行

限なくとほくなりゆく都かなすみだ川原のわたりしてけり

旅宿

旅人のいり野の尾花かりふきてつくれる庵にむすぶ手枕

旅泊

ゆきめぐりいざこととはむ泊り舟こふる都の人もありやと

海眺望

今もまた松浦の海にみわたせばいや遠ざかる船出かなしも

寄社祝

石清水きよき心にすむといふ<sup>きく</sup>神のちかひは猶もたのもし

寄日祝

久方の天の岩戸<sup>の</sup>をあけしより出づる朝日はくもるとき<sup>ま</sup>なし